

ディーパンカラシュリージュニャーナの 『菩提道灯論細疏』和訳(6)

望 月 海 慧

はじめに

本稿は、望月 2002 に続くものである。今回の和訳箇所は、「方便と智恵」に関するセクションであり、^{注1}根本偈では BPP 167-240 にあたる。著者は、この「方便と知恵」に対して中観思想に基づいて解説しており、彼が中観思想をどのように受容していたのかを知る上で重要なセクションである。『菩提道灯論細疏』の記述に基づいて概要を簡略に示すと次の通りである：

1. 方法と知恵の対関係 [BPP 167-176]
2. 方便と知恵の区別 [BPP 177-180]
3. 方便 [BPP 181-188]^{注2}
方法=五波羅蜜多
4. 知恵 [BPP 189-192]

注1 前稿以後、次の研究が発表されている。Lobsang Dorjee, *Āryatriskandhasūtram and its Three Commentaries by Ācārya Nāgārjuna, Jitāri and Dipaṅkaraśrījñāna*. Sarnath 2001; Amy Heller, Did Atiśa Visit Zha lu Monastery? Tracing Atiśa's Influence on Tibetan Iconography, in Deborah E. Klimburg and Eva Allinger ed., *Buddhist Art and Tibetan Patronage Ninth to Fourteenth Centuries*, Lieden 2002, pp.45-58; Franz-Karl Ehrhard, The Transmission of the *Thig-le bcu-drug* and the *Bka' gdams glegs bam*, in Helmut Eimer and David Germano ed., *The Many Canons of Tibetan Buddhism*. Leiden 2002, pp.29-56, 小野2001。また、『中華大藏經 丹珠尔(对勘本)第64卷』(中国藏学出版社, 2001)が出版され、*Bodhiṃārgadīpaikā* を始めとする Dipaṅkaraśrījñāna の「中観部」の著作が収録されている。

注2 本テキストでは、BPP 185-188 に対する解説はなされない。

知恵＝無自性性論証

- 4.1. 四支生滅因 [BPP 193-196]
- 4.2. 金剛片因 [BPP 197-200]
- 4.3. 離一多因 [BPP 201-204]
- 4.4. 縁起因 [BPP 205-208]
5. 修習 [BPP 209-224]
6. 経証 [BPP 225-232]
7. まとめ [BPP 233-240]

また、本セクションにおいて最も注目すべき記述が、「諸存在の無自性」を説く論書として列挙される中観の諸論書とその論師たちの一覧である。すなわち、

ナーガールジュナ^{E3} 『根本中頌』『無畏論』『六十頌如理論』『廻諍論』

注3 同じ著者の RKU では、Nāgārjuna の著作として、次のものを列挙している。すなわち「凡夫達に役立つに *Pratītyasamutpādacakra* を著された。大臣達に役に立つように *Prajñāsataka* と *Dvādaśkāra* などを著された。王達のために *Suhṛllekha* と *Ratnāvalī* を著された。四衆に属する福德の少ない者達のために *Dhūpayogaratnamālā* などを著された。医者達のために *Yogaśataka* と *sByor ba sum cu tsa gnyis* と *Nyi shu pa* と *bDud rtsi'i snying thigs* と *Jīvasūtra* などを著された。大乘に転じた人たちのために *Bodhicittotpādaśādhāni* と *Byang chub sems dpa'i spyod pa gsal ba* と *Sūtrasamuccaya* などを著された。またそれらの上に *Mūlamadhyamakakārikā* と、それを広げた *Vigrahavyāvartanī* と *Sūnyatāsaptati* を著しにられた。その支分として *Yukti-śaṣṭika* と *Mahāyānavimśikā* と *Bhavasamkrānti* と *Bhāvanākrama* と *Vaidalyasūtra* と *Akṣarasataka* と *Bodhicittavivaraṇa* と *Dharmadhātustava* と *Paramārthastava* と *Nirupamastava* と *Acintyastava* と *Lokāitastava* と *Cittavajrastava* と *Śālistanbakasūtra-ṭīkā* と *Pratītyasamutpādahrdayakārikā* と *-vyākhyāna* [を著された]。同じように聡明な根である大乘やマントラ [乗] の器となった者達には *Śrīguhyasamājatantra* の意味である *Śrīguhyasamājamaṇḍalavidhi* と *Cho ga nyi shu pa* と *Pinḍīkṛta* と (*Śrīguhyasamājahāyogatantra*) *utpattikramasādhanaśūtramelāpaka* と *Pañcakrama* を著された。 *Śrīvajracatuhpūṭhamahātantraṭīkā* を著された。 *Nāmasamgūtivṛtti* と *Khasarṇa-sādhana* と *Arapacana(-sādhana)* と *Vāksādhana* と *Tshig sbyin gzhon nu* などのたくさんの方の成就法を著された。 *Trisamatavyūhavidhi* と *Ekavīrasādhana* とその注釈である (*Kalyāṇa*-) *kāmadhenu* と *gTor ma sum cu pa* と *Sangs rgyas mnyam sbyor gyi rdzogs pa'i rim pa'i man ngag chen po* など多くを著された」とある(宮崎 1993: 21-22)。

ディーバンカラシュリージュニャーナの『菩提道灯論細疏』和訳(6)(望月)

『空性七十論』『宝鬘論』『大乘二十論』『百字論』

『稲竿經広釈』

アーリヤデーヴァ 『中観迷乱摧破』『肢分論』『手指論』『智心髓集』

チャンドラキールティ 『入中論』『六十頌如理論広注』『中観五蘊論』

『プラサンナパダー』

バーヴィヴェーカ 『中観思^{註4}扱炎』『般若灯論』

シャーンタラクシタ [『中観荘嚴論』]

シュリーグプタ [『入真實論』]

シャーンティデーヴァ

ポーディパドラ

また『根本中頌』の注釈者としては、ナーガールジュナ、チャンドラキールティ、バーヴィヴェーカ、ブッダパーリタ、スティラマティ、グナマティ、グナシュリー、グナダッタの八名をあげ、^{註5}バーヴィヴェーカの『般若灯論』の注釈者としてアヴァローキタヴラタとデーヴァシャルマンとをあげている。

また、論理学に対しては、ダルマキールティとダルモーツラに言及し、「外道の論難を退けるために多くの著書を著した」とするものの、自らが「勝義において修習すべきものに論理学は必要ない」と述べている。さらに「推論を最高のものとする論理学の文献を投げ捨て、ナーガールジュナの教えを継承する概説書を修習すべきである」と述べている。これらの記述から、著者は論理学はあくまでも世俗の手段であり、中観の教えはこれらの論理学を越えたものであると認識していたと思われる。すなわち、ダルマキールティなどの論理学を中観の教義よりも下部のものとして認識していたとすることができる。

注4 ここでは、*Madhyamakahrdayakārikā* ではなく、その注釈書の *Tarkajvāla* の名称があげられている。

注5 ただし、根本頌の解釈をめぐる、バーヴィヴェーカによるブッダパーリタ批判、チャンドラキールティによるバーヴィヴェーカ批判への言及は見られない。

『菩提道灯論疏』和訳(6)^{註6}

今度は、方法と知恵の対関係を知る知恵により福德の集まりと知恵の集まりの二つの対関係を完全にすべきである、と考えてから、

完全なる知恵の行を離れていれば、障害は尽きないであろう。

[BPP167-168]

などという。すなわち、止により行為と煩惱と、異熟と、法の障害などを捨てることができず、観によりそれらを捨てた後に〔障害は〕尽きるので、観に依存すべきである、というのが語の残りである。^{註7}

今度は、方法と知恵が詳しく解説される。すなわち、

何故ならば「縛られている」と説かれているので^{註8}[BPP175]

とは、『聖伽耶山頂経』と『聖維摩経』に、^{註9}

方法を離れた知恵は束縛である。知恵を離れた方法も束縛である。^{註10}

と説かれている。

それ故にどちらも捨てるべきではない。[BPP176]

注6 前稿までは、ここに Blo bzang dpal ldan bstan 'dzin snyan grags の注釈書に基づくシノプシスを付していたが、これについては、望月2002bを参照していただきたい。

注7 BPP 169-172:

それ故に煩惱と所知の障害を残らずに捨てるために、智恵の完成のヨーガを常に方法をともなって修習すべきである。

注8 BPP 173-174:

方法を離れた智恵と智恵を離れた方法も、

注9 *Gayāśīrṣasūtra*. Tib. D. 109, P. No. 777, Chin. T. Nos. 464-467.

注10 *Vimalakīrtinirdeśasūtra*. Tib. D. No. 176, P. No. 843, Chin. T. Nos. 474-479. Oshika 1970: (47) (Cf. 長尾 1974: 81, 大鹿 1988: 57):

thabs kyis ma zin pa'i shes rab ni bcings pa'o // thabs kyis zin pa'i shes rab ni grol pa'o // shes rab kyis ma zin pa'i thabs ni bcings pa'o // shes rab zin pa'i thabs ni grol pa'o //

Bhāvanākrama I, Tucci 1917: 504, Yuyama 2002: 222-223 (湯山 1969):

upāya-rahitā ca prajñā-bandhaḥ / prajñā-rahitaś copāyo bandhaḥ /

とは、吉祥なるジュニャーナキールティが『波羅蜜多乘修習次第概説』^{註11}に次のように、

完全なる知恵の本質と、布施などの方法に正しく入る。さらに『聖伽耶山頂経』に、

これら二つは菩薩道に収めらる。すなわち、方法と知恵である。^{註12}

とお説きにいられている。すなわち、方法は布施などの完全性と、[四]無量と[四]摂事などの区別により分けられる。その同じことは『聖無尽慧経』^{註13}や『宝雲経』^{註14}などの經典に説かれている。知恵は、その方法が退くことを断じる原因である。それによっても、方法を正しく考察した後に転倒せず、自らと他者の利益をありのままに領受するので、マントラにより

注11 **Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa*. Tib. D. No. 3922 (Ki 76b4-77b2), 4542, P. No. 5317, 5456 (Gi 200a4-201a6). 以下長い引用が続くが、これは Kamalaśīla の *Bhāvanākrama* I (Tucci 1986: 503-508, Namdol 1997: 15-25, Broeck 1977: 9-14, Gomez 1977: 186-190, Sharma 1997: 18-23, 芳村 1974: 313-320, 東 1968: 52-59, 一島 2001) からの引用により成り立っている。すると、Dipamkarasrījñāna は *Bhāvanākrama* I のこの部分を知らずに、Jñānakīrti のテキストとして引用したのであろうか。Cf. 磯田 1979, Taniguchi 1992.

注12 *Gayāśīrṣasūtra*. Tib. D. 109, P. No. 777, Ngu 317a7-8 (Chin. T. No. 464, p.482c11-12, No. 465, p.485b15-16, No. 466, p.488b8-10, No. 467, p.491a19-20):

byang chub sems dpa' dag lam 'di gnyis dang ldan na myur du bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub mngon par rdzogs par 'tshang rgya'o // gnyis gang zhe na 'di lta ste / thabs dang shes rab'o //

Bhāvanākrama I (Tucci 1986: 504) :

āryagayāśīrṣe cōktaṃ / dvāv imau bodhisattvānāṃ saṃkṣiptau mārgau / dvābhyāṃ mārgābhyāṃ samanvāgatā bodhisattvā mahāsattvāḥ kṣipram anuttarāṃ samyaksaṃbodhim abhisambhotsyante / katamau dvau / upāyaś ca prajñā ca iti /

See also Sharma 1997: 87. この部分は *Bhāvanākrama* II (Goshima 1983: 65, 芳村 1974: 404), *Bhāvanākrama* III, Tucci 1971: 14 (芳村 1974: 433) においても引用される。ただし、ここでの引用は *Bhāvanākrama* I よりも、省略した形の *Bhāvanākrama* II と *Bhāvanākrama* III の方が近い。なお *Bhāvanākrama* に引用される經典については、Goshima 1983: 83-82 を参照のこと。

注13 *Akṣayamatīnirdēśasūtra*. Tib. D. No. 175, P. No. 842, Braarvig 1993, Chin. T. No. 403.

注14 *Ratnameghasūtra*. Tib. D. No. 231, P. No. 897, Chin. T. Nos. 658-660.

尽きた毒と同じく、煩惱とならないであろう。さらに同じ經典に、

方法とは集めることを知ることである。知恵とは正しく断じることを知ることである。^{註15}

と説かれており、『聖信力入印法門經』にも、

方法に長けているとは何かと言え、一切法を集めることを知ることである。知恵とは何かと言え、一切法を区別なく知ることに長けていることである。^{註16}

とお説きになられている。これらは、[十]地に住する者も依存すべきなので、知るべきだけのものではない。何故ならば『十地經』などに、

残りの完全性についても、行こなわないことははない。^{註17}

とお説きになられているので、「菩薩は十地のすべてにおいても、すべての完全性をよく行うべきである」とお説きになられている。さらに知恵の完全性のうち一つを喜ぶ菩薩に関しては、『一切功德莊嚴王經』に、

マイトレーヤよ、菩薩たちの菩提のために六つの完全性を正しく収めた者に対して、劣った人たちは次のように、「菩薩の完全なる知恵こそを学ぶべきである。残りの完全性はどのように必要であろうか」と

注15 *Gayāśīrṣasūtra*. Tib. D. No. 109, P. No. 777, Ngu 317a8 (Chin. T. No. 464, p.482c12-13, No. 465, p.485b16-17, No. 466, p.488b10-11, No. 467, p.491a20-21):

de la thabs ni bsdu ba shes pa'o // shes rab ni yongs su gcod pa shes pa'o //

Bhāvanākrama I, Tucci 1986: 505:

upāyaḥ saṃgraha-jñānaṃ / prajñā pariccheda-jñānaṃ /

注16 *Śraddhābalādhānāvaiṭāramudrāsūtra*. Tib. D. No. 201, P. No. 867, Tsu 34a. Chin. T. No. 305, p.944a, 943c. ただし東 1968: 54 が指摘するように、同經に完全に一致する文章は見られない。 *Bhāvanākrama* I, Tucci 1986: 505:

upāya-kausalam katamam / yat saṃgrahaḥ sarva-dharmānām / prajñā katamā / yat sarva-dharmānām asaṃbhedana-kausalam /

注17 *Daśabhūmisūtra*. Skt. 近藤 1936: 146.14 (Tib. D. No. 44, P. No. 761.31. Chin. T. Nos. 285-286, No. 287, p.562a14-15, Jap. 荒牧1974: 265):

tasya daśabhyaḥ pāramitābhyaḥ prañidhāna-pāramitātiriktatamā bhavati / na ca paśeṣāsu na samudāgacchati /

Bhāvanākrama I, Tucci 1986: 505:

na ca pariśeṣāsu na samudācarati /

ディーバンカラシュリージュニャーナの『菩提道灯論細疏』和訳(6)(望月)

言い、彼は残りの完全性を低いものと思っているのだらう。^{注18}

と広くお説きになられており、『聖大日経』にも、

一切智のこの知恵は、大悲の根本をもち、菩提心の原因をもち、方法の究極である。^{注19}

とお説きになられている。それ故に、どちらも一切時に依存すべきものである。

そのようならば、世尊は無住処涅槃を完成している。さらに布施などの方法により、物質的身体と、国土と、衆会などの大きな財産の完全なる結果を完全に保持しているので、世尊は涅槃に住されない。完全な知恵により転倒を捨てられているので、輪廻に住することはないのである。何故ならば輪廻は転倒の主体であるから。[『金剛般若経』に、]

法の異門を筏のように知る者たちは、諸法も捨てているので、法でないものは言うまでもない。^{注20}

とお説きになられたものは、まず「転倒に明らかに執着することを捨てる

注18 *Sarvadharmasamgrahavaipulya*. Tib. No. 114, P. No. 782, Chin. T. No. 1374. ただし東 1968: 56 が指摘するように、この引用文を同経に確認することはできないが、*Śikṣāsamuccaya* (Śik 97: 6-8, Bendall 1981: 98-99) に同じ引用文を見ることができる。*Bhāvanākrama* I, Tucci 1986: 506:

yo 'ayaṃ maitreya ṣaṭ pāramitā-samudāgamo bodhisattvānāṃ bodhāya taṃ te mohapuruṣā evaṃ vakṣyanti / prajñāpāramitāyāṃ eva bodhisattvena śikṣitavyaṃ kiṃ śeṣābhiḥ pāramitābhir iti / te 'nyāṃ upāya-pāramitāṃ dūṣayitavyāṃ manyante /

Śik, pp.96-99.

注19 *Mahāvairocanaḥśambodhivikurvatī-adhiṣṭhānavaipulyasūtra*. Tib. D. No. 497, P. No. 126, p.241.1, Chin. T. No. 848. 越智36-37:

rgyu ni byang chub kyi sems so // rtsa ba ni snying rje chen po'o // mthar thug pa ni thabs so //

Bhāvanākrama I, Tucci 1986: 506:

tad etat sarvajña-jñānaṃ karuṇā-mūlaṃ bodhicitta-hetukam upāya-paryavasānam /

Cf. also 東 1972.

注20 *Vajracchedikāprajñāpāramitāsūtra*. Skt. Conze 1957: 32 (Tib. D. No. 16, P. No. 739, Chin. T. Nos. 220(9), 235-239):

kolopamaṃ dharma-paryāyam ājānadbhir dharmā eva prahā tavyāḥ prāg evā dharmā /

Cf. 長尾1973: 18.

べきである」とお説きになられているが、「目的を完成する為にも、存続するべきではない」とお説きになられているのではない。さらにまた、「法は正しく保持されるべきであり、誤りは保たれるべきではない」という意味である。それ故に、

一切時に方法と完全な知恵の主体は、依存すべきものであるから、

そこから無住処涅槃となるであろう。

と典拠をそなえてお説きになられている^{註21}。師も、

それ故に一切時に方法と知恵の両方をそなえるべきであり、福德と知恵

注21 * *Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa*. Tib. D. No. 3922 (Ki 76b4-77b2), 4542, P. No. 5317, 5456 (Gi 200a4-201a6):

shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i ngo bo nyid dang / sbyin pa la sogs pa'i thabs la rab tu 'jug go // de yang 'phags pa ga ya mgo'i ri las gnyis po 'di dag ni byang chub sems dpa' mams kyi lam gyis bsdu pa ste / 'di lta ste thabs dang / shes rab po zhes gsungs pa yin ste / thabs ni sbyin pa la sogs pa'i pha rol tu phyin pa dang / tshad med pa dang / bsdu ba'i dngos po la sogs pa'i dbye bas phye ba ste / de nyid kyang 'phags pa blo gros mi zad pa dang / dkon mchog sprin la sogs pa'i mdo las gsungs so // shes rab ni thabs de nyid phyin ci ma log par yongs su gcod pa'i rgyu'o // des kyang thabs yang dag par brtags nas phyin ci ma log pas bdag dang gzhan gyi don ji lta ba bzhin nyams su len pas sngags kyis zin pa'i dug spyod pa dang 'dra bar kun nas nyon mongs par mi 'gyur ro // de yang mdo sde de nyid las thabs ni bsdu ba shes pa'o // shes rab ni yongs su gcod pa shes pa'o zhes gsungs pa dang / 'phags pa dad pa'i stobs bskyed pa las / thabs la mkhas pa gang zhe na / gang chos thams cad kyi bsdu ba shes pa la mkhas pa'o // shes rab gang zhe na / gang chos thams cad dbyer (D. 77a) med pa shes pa la mkhas pa'o zhes gsungs pa'o // 'di dag la ni sa la gnas pas kyang bsten par bya'o // shes rab tsam 'ba' zhid ni ma yin no // gang gi phyir sa bcu pa la sogs pa'i mdo las pha rol tu phyin pa lhag ma mams la yang mi spyod pa ma yin no zhes gsungs pas byang chub sems dpa' sa bcu thams cad du pha rol tu phyin pa thams cad la kun du spyad par bya'o zhes bshad do // de bzhin du yang shes rab kyi pha rol tu phyin pa la gcig tu dga' ba'i byang chub sems dpa' mams kyi dbang du mdzad nas / yongs su rgyas pa'i mdo chos thams cad bsdu pa las byams pa gang yang byang chub sems dpa' mams kyi byang chub kyi phyir pha rol tu phyin pa drug car gzung bar bya ba de la skyes bu blun po mams ji ltar byang chub sems dpa' mams shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'ba' zhid la bslab par bya'i / pha rol tu phyin pa lhag ma mams kyis ci zhid bya zhes zer zhing / des pha rol tu phyin pa gzhan dag la smod pa nyid du sems par 'gyur ro zhes bya ba la sogs pa rgya cher gsungs pa dang / 'phags pa mam par snang mdzad mngon par rdzogs par byang chub pa'i rgyud las kyang / thams cad mkhyen pa'i ye shes 'di ni snying

の集まりの対関係を集めるべきである。^{注22}

とお説きになられている。

そのように、その「方法と知恵の二つの対関係に入るそれら二つをそなえるべきである」ということを示してから、今度は「方法」と言われるものと「知恵」と言われるその両者自身がどのようなものか説明をするために、

「知恵とは何か」、「方法とは何か」という疑念は捨てられるべきでなので、方法と知恵の正しい区別を明らかにするべきである。[BPP177-180]というのがそれである。すなわち「疑念は捨てられるべきなので」とは、昔の偉大な規範師たちが、この二つを種々にお説きになられているからである。それ故に方法と知恵の区別は次の通りである。すなわち、ある文献には、

方法とは、菩薩の有情に対する大悲である。それらも対象の区別により、三種となっている。

と出ており、また他のものには、

rje chen po'i rtsa ba can / byang chub kyi rgyu dang ldan pa / thabs kyi mthar phyin pa'o zhes gsungs pa yin no // de bas na gnyis ka yang dus thams cad du bsten par bya'o // de ltar na bcom ldan 'das mi gnas pa'i mya ngan las 'das pa 'grub pa yin no // de yang sbyin pa la sogs pa'i thabs kyis gzugs kyi sku dang zhing dang 'khor la sogs pa'i longs spyod chen po'i 'bras bu phun sum tshogs pa yongs su 'dzin par mdzad pas / bcom ldan 'das mya ngan las 'das pa la gnas par mi mdzad do // shes rab kyi phyin ci log ma lus par spangs pas 'khor bar gnas par mi mdzad de / 'khor ba ni phyin ci log gi bdag nyid can yin pa'i phyir ro // de yang chos kyi nam grangs gzings lta bur shes pa mams kyis ni chos mams kyang spang bar bya na chos ma yin pa lta ci smos zhes ji skad du gsungs pa lta bu yin / de la phyin ci log tu mngon par zhen pa spang (D. 77b) bar bya'o zhes gsungs kyi / dgos pa'i don rdzogs par bya ba'i don du yang gnas par mi bya'o zhes gsungs pa ma yin no // de yang chos su gzung bar bya'i / mi gzung bar mi bya'o zhes gsungs te / las log pas gzung bar mi bya'o zhes bya ba'i don to // de bas na dngos po thams cad de ltar gzigs te gsungs pa ni // dus kun du ni thabs dang ni // shes rab pha rol bdag can // bsten bya gang phyir de las ni // mi gnas mya ngan 'das par 'gyur // zhes bya ba yin no //

注22 Sherburne 2000: 223 は、Bodhibhadra の *Samādhisambhāraparivarta* (Tib. D. No. 3924 Ki 86b, P. No. 5319, A 94b, No. 5444. Gi 174a) を指摘するが、前述の *Viamala-kīrtinirdeśasūtra* と *Gayāśrīrṣasūtra* の引用に関する言及はあるものの、全く同一の引用は見られない。

世俗の相のその菩提心が方法である。

と出ている。師ボーディバドラが、次のように、

完全なる知恵を除いた布施の完全性などの善の集まりのすべてを勝者は
方法と解説している。[BPP181-184]

とお説きになられたそれは、私の根本偈に述べられている。「布施の完全性など」と言われるものについて、ここに布施は三種である。すなわち施主と、物質と、場所^{註23}の区別による。施主は、利得と尊敬や、名声と栄冠のためや、他者による嘆願のためや、慈悲のためや、敬意のためなどである。物質は、次のように法と、財物や、恐れな^{註24}いことと、慈愛などである。場所は、次のように三宝と、師の住所と、五有情の一切の衆生とである。それも、『四座タントラ』^{註24}に、

六万のシュードラの種姓は一人の清浄なバラモンに仕える。

などと詳しくお説きになられており、また經典に、

優婆塞は、他の師に依存すべきではない。

などと詳しくお説きになられており、『法解説百論』^{註25}にも詳しく説かれている。

さらにまた尊尊は『三界中勝甚意大王瑜伽タントラ』に、

灌頂の布施と、法の布施と、富の布施と、食物の布施と、恐れな^{註26}い布施と、慈愛の布施とである。それらは弟子と、まだ現れていない心と、比丘と、バラモンと、貧者と、畜生と、かすかな心の者と、有情の極端のものたちに順序通り [与えられる]。

注23 Tib.: zhing.

注24 *Śrīvajracatuhpīthasādhana*. Tib. D. No. 1611, P. No. 2482. Cf. 塚本 1989: 312.

注25 Tib. *Chos bshad pa brgya pa*. このテキストについては、現時点で未確認である。

注26 *Trailokyavijayamahākāparājā*. Tib. D. No. 482, Ta 34b5-6, P. No. 115:

de la dbang bskur ba sbyin pa dang / nor sbyin pa dang zas sbyin pa dang chos sbyin pa'o // de la dbang bskur ba sbyin pa ni de bzhin gshegs pa rnam la'o // nor sbyin pa ni sems can thams cad la'o // zas sbyin pa ni byol song thams cad la'o // chos sbyin pa ni sems ca mi snang ba thams cad la'o //

[と説かれている。]「など」とは、他の[四つの]完全性も解説したのである。すなわち戒は、次のように、初発心の菩薩と、行に入られた者と、不退転の者と、不生の法に耐えることを得た者と、一生補処の者と、最後の生の菩薩の戒である。その他の完全性は、經典に出ている通りである。「善の集まりのすべてを」とは、後に述べるであろう。さらにまた、これらの意味を詳しくは、經典や、さらに經典の意味を明らかにした『経集』^{注27}や、『菩薩地』^{注28}や、『入菩提行論』^{注29}や、『集学論』^{注30}や、規範師シューラの『波羅蜜多集』^{注31}を見るべきである。

「方法を修習することにより」^{注32}という偈は、長さのままである。

知恵とは何かと言えば、次のように、ともに生じることや、聞くことから生じたものや、想から生じたものや、修習より生じたものや、また文献には、

一切の戲論の場所や、文字にはなっていないものに入った者は「心の金剛による知恵である」と宣言されている。

と説かれているのが、それである。同じように根本[偈]にも、

蘊・界・処は生じることがないと分別し、自性を欠くものであると知ることが、知恵である、と正しく説明されている。[BPP 189-192]

と言う。[五] 蘊と [十八] 界と [十二] 処とは内外の一切の法をまとめたものである。すなわち世尊が、

バラモンよ、すべてのものを「すべて」ということは、蘊と界と処のこ

注27 *Sūtrasamuccaya*. Tib. D. No. 3934, P. No. 5330. Pāsādika 1989, Chin. T. No. 1635. Cf. 塚本1990: 159-161.

注28 *Bodhisattvabhūmi*. Skt. 荻原 1971, Tib. D. No. 4037, P. No. 5338, Chin. T. Nos. 1579, 1581. Cf. 塚本1990: 325-328.

注29 *Bodhi[satva]caryāvatāra*. Skt. Minayev 1889, Tib. D. No. 3871, P. No. 5272, Chin. T. No. 1662. Cf. 塚本1990: 255-267, Saito 1993, 2000.

注30 *Śikṣāsamuccaya*. Skt. Bendall 1977. Tib. D. No. 3940, P. No. 5336, Chin. T. No. 1636. Cf. 塚本1990: 251-254.

注31 *Pāramitāsamāsa*. Tib. D. No. 3944, P. No. 5340. Cf. Meadows 1986.

注32 BPP 185-188:

方法を修習することにより、自分自身で智恵を正しく修習する人は、菩提を速やかに得るが、無我だけの修習では[得られ]ない。

とである。

とお説きにいられている。「生じることがない」とは、後に述べるであろう。「説明されている」とは、仏と師とにより説かれている、ということである。ここに言う。^{注33}

[六つの] 完全性と、[四] 撰事と、四無量と、七支分と、十法行と、その他の善業と、聖なる七宝と、六念などと、

マンダラと、小さな仏像を囲むことなどが方法であり、受用と変化身 [の原因である。] 知恵の完全性の一つだけが知恵であり、法身の原因である。

[ここに] 言う。善男子よ、そのような知恵と言われるものは、どのような在り方により知覚されるのかと言うのならば、[答えて] 言う。四大因により知られるのである。^{注34} 四つとは何かと言えば、四支生滅の因と、金剛片の因と、一多を離れた因と、縁起の因とである。それらも何かと言えば、

存在しているものが生じる、というのは正しくない。[BPP 193]

などという四偈により示されている。そのうち、

存在しているものが生じる、というのは正しくない。存在していないものは、虚空の花のようなものである。二つの過失になってしまうので、どちらのものも生じることはない。[BPP193-196]

ということにより、四支生滅の因が示されている。すなわち、ここにすでに存在している法は、生じないであろう。何故ならばすでに生じたものであるから。また存在していない法も生じることはない。何故ならばそれらは自性により成立しておらず、生じる原因がないからである。「どちらのものも」という三つ目の束は、いかなるものもここには存在しない。この意味は規範師シャーンティ

注33 著者による、9音節・8 パーダからなる偈頌である。

注34 Dipamkaraśrījñāna の「四大因」による無自性性論証については、江島1980: 240-248 において詳論されている。

デーヴァによっても説かれている。すなわち、

すでに存在している事物に対して、原因により何がなされるのか。しかも、それがまだ存在していない場合も、原因は何の必要があるであろうか。百千万の原因によっても、まだ存在しない事物から変化することはない。そのような場合にどのような事物になろうか。事物以外のものは何があるうか。

存在しない時に、事物がなければ、いつ事物は生じるのであろうか。事物が生じることがないことにより、存在しない事物は離れないであろう。

存在しない事物が離れなければ、事物が存在する機会は生じない。何故ならば二つの自性をもつものになってしまうから、存在も非存在もないのである。

同じように、滅するものでも、存在するものでもなく、常に把握されない。それ故にこれらの存在は生じることがなく、滅することがない。^{注35}

と詳しくお説きにいられている。

事物は自らより生じないし、他のものからも、その両者からでもなく、

無因からでもない。それ故に本質としては自性がない。[BPP 197-200]

というこれにより、金剛片が示される。すなわち、アートマンや、^{注36}運命や、^{注37}自

注35 BCA 9.146-150. Minayev 1989:

vidyamānasya bhāvasya hetunā kiṃ prayojanam /
athāpy avidyamāno 'sau hetunā kiṃ prayojanam //
nābhāvasya vikāro 'sti hetu-koṭi-satair api /
tadavasthaḥ kathaṃ bhāvaḥ ko vānyo bhāvatāṃ gataḥ //
nābhāva-kāle bhāvas cet kadā bhāvo bhaviṣyati /
nājātena hi bhāvena so 'bhāvo 'pagamiṣyati //
na cānapagate 'bhāve bhāvāvasarasambhavaḥ /
bhāvas cābhāvatāṃ naiti dvisvabhāva-prasaṅgataḥ //
evaṃ na ca nirodho 'sti na ca bhāvo 'sti sarvadā /
ajātam aniruddhaṃ ca tasmāt sarvam idaṃ jagat //

Cf. 金倉1965: 203-204, Saito 1993: 26-27, 53, Saito 2000: 59-60.

注36 Tib.: bdag. *Prajñāpradīpa* では、最初に「自然 (ngo bo nyid; svabhāva)」をあげ

ており、次の項目も含め、チベット語の段階で混乱が生じた可能性もある。

注37 Tib.: phyā (C, D: phyag). Sherburne 2000: 271, n.20 は Carvāka と Ājivaka の説とする。

在天^{注38}や、ブルシャ^{注39}や、業^{注40}や、プラクリッティ^{注41}や、グナ^{注42}や、梵天^{注43}や、ヴィシュヌ
や、大天^{注44}など内外の作用をなす人と、さらにまた、自らの宗派でも、六因^{注45}や四
縁^{注46}による事物が生じることを認めるそれらのものは、誤った分別である。すな
わち、それらを否定するために、聖ナーガールジュナが、

注38 *Prajñāpradīpa* (Tib. D. No. 3853, Tsha 51a7-b5, Walleser 1914: 18) において最
初に引用される *Śvetāsvatāropaniṣad* IV. 11 は、*Tarkajvālā ad Madhyamakahrdayakārikā*
ā VIII. 17 では Vedānta 学派の説とされている (能仁1992b: 98-99, n.16)。

注39 *Prajñāpradīpa*, Tib. D. Tsha 51b5-52a6, Walleser 1914: 19-21. Sherburne 2000: 271,
n.20 は Sāṃkhya 学派の説とするが、Avalokītavratā (*Prajñāpradīpaṭīkā*) は Vedānta
学派の説とする (能仁1992b: 99-100, n.22)。

注40 Sherburne 2000: 272, n.20 は Mīmāṃsā 学派と Jaina をあげている。

注41 *Prajñāpradīpa*, Tib. D. Tsha 52a6-b6, Walleser 1914: 21-22. Avalokītavratā (*Pra-
jñāpradīpaṭīkā*) は Sāṃkhya 学派の説とする (能仁1992: 101, n.35)。 *Prajñāpradīpa* で
は、本箇所において梵天とグナにも言及していることから、本論の続二項目も
Sāṃkhya 学派の説と考えられる。

注42 *Prajñāpradīpa*, Tib. D. No. 3853, Tsha 50b7-51a1, Walleser 1914: 16:

yang na rgyu med ces bya ba ni rgyu ngan pa ste / chung ma med pa zhes bya ba
la sogs pa bzhin no // rgyu ngan pa gang zhe na / ngo bo nyid dang / dbang phyug
dang skyes bu dang / gtso bo dang / dus dang sred med kyi bu ka sogs pa ste / yang
dag pa ma yin pa'i phyir ro //

Cf. Kajiyama 1989: 435, 能仁 1992b: 87. また *Prasannapadā*, p.26 (丹治1988: 21
Ruegg 2002: 45-46, n. 46) では、*Śālistambasūtra* からの引用として「自・他・両者・
無因・自在天・時・原子・原質・自然」があげられている。

yathoktaṃ sūtre / sa cāyaṃ bija-hetuko 'ñkura utopadyamāno na svayaṃ kṛto
parakṛto nobhayakṛto nāpy ahetu-samutpanno neśvara-kālānuprakṛti-svabhāva-sambhūta
iti /

Śālistambasūtra 18, Schoening 1995: 422:

de ltar rten cing 'bred par 'byung ba'i yan lag bcu gnyis po 'di ni / rgyu gzhan
dang / gzhan las byung ba / rkyen gzhan dang gzhan las byung ba / rtag ma yin / myi
rtag pa ma yin / 'dus byas ma yin / 'dus ma byas ma yin / rgyu myed pa ma yin /
rkyen myed pa ma yin / myong ba po yod pa ma yin / zad pa'i chos ma yin / 'jig
pa'i chos ma yin / 'gog pa'i chos ma yin te / thog ma myed pa'i dus nas / zhugs pa
rgyun ma chad par klung gi rgyun bzhin du rjes su zhugs pa'o //

Cf. also Schoening 1995: 283-285, 601-616, 大南 1989: 112-121, 芳村 1959: 89-91.

注43 AKBh: 82:

kāraṇaṃ sahabhūś caiva sabhāgaṃ saṃprayuktakaḥ /
sarvatrago vipākakhyāḥ śaḍvidho hetur isyate // 2.49
śaḍ ime hetavaḥ / kāraṇa-hetuḥ sahabhū-hetuḥ sabhāga-hetuḥ saṃprayuktaka-hetuḥ
sarva-traga-hetuḥ vipāka-hetur iti /

Cf. 桜部 1969: 352.

ディーバンカラシュリージュニャーナの『菩提道灯論細疏』和訳(6)(望月)

自らからではなく、他からではなく、両者からではなく、無因でもない。
いかなる事物も、いかなるところでも、生じるものでも、存在するものでも^{注45}
もない。

と『根本中般若論』にお説きになられている。この意味の詳しくは、それ自身と、六つの大きなその注釈と、二つの大きな広注と、『中観広破論』^{注47}や、『プラサンナパダー』^{注48}や、『思釈炎』^{注49}や、『入中論』^{注50}などを見るべきである。

また一切の諸法も、一と多により考察するならば、自性により知覚されないで、自性がないものとして確定する。[BPP201-204]

というこれにより、一と多を離れる因が示され、「また」というこの意味が説かれている。「一と多として考察するならば」と言う意味は、規範師シャーン

注44 AKBh 98.5-6:

catvāraḥ pratyayā uktāḥ (2.61c)

kvoktāḥ sūtre / catasraḥ pratyayatāḥ / hetu-pratyayatā samanantara-pratyayatā ālambana-pratyayatā adhipati-pratyayatā ceti /

Cf. 桜部 1969: 391-392.

注45 *Mūlamadhyamakārikā* I.1. de Jong 1977: 1:

na svato nāpi parato na dvābhyāṃ nāpy ahetutaḥ /
utpannā jātu vidyante bhāvāḥ kva cana ke cana //

注46 本論の以下の記述では、*Mūlamadhyamakārikā* の注釈者として Nāgārjuna, Candrakīrti, Bhāviveka, Buddhapālita, Sthiramati, Guṇamati, Guṇasīri, Guṇadatta の八名をあげている。「六つ」が、何れの論書を示すかは明らかではなが、続く二つの広注の著者二人を加えてこれらの八名になるのか。Cf. 塚本1990: 207.

注47 Tib : *dBu ma rnam par 'thag pa. Vaidalyaprakaraṇa* (Tib. D. No. 3830, P. No. 5230) のことか (江島 1980: 240 は否定)。Cf. 塚本1990: 121-122, Tola 1995b.

注48 *Prasannapadā*. Tib. D. No. 3853, P. No. 5260. Cf. 塚本1990: 224-228, Hosokawa 1978, 1985, 北島 1991, 釈惠敏・釈果徹『生命縁起観』台北, 1994, May 2000, 東方学院関西地区教室編『チャンドラキールティのディグナーガ認識論批判』(法蔵館, 2001), 岸根 2001, 2001b, 2002, Ruegg 2002.

注49 *Tarkajvālā*. Skt. Lindtner 2001, Tib. D. No. 3856, P. No. 5256. 江島 1980: 257, (84) によると、相当箇所は「MHK 137-222, TJ ad ibid.」となる。Cf. 塚本1990: 218-224, Hosokawa 1984, 川崎 1992, Eckel 1992, Lindtner 1995, 1998, 2001b, Heitmann 1998, Hoonart1999, 2000, 2001, 2001b, 2002, Qvarnström 1989, Watanabe 1998, 2000.

注50 *Madhyamakāvātāra*. Tib. D. No. 3861, P. No. 5261-5262. Cf. 塚本1990: 233-237, Huntington 1989, Fenner 1990, Tauscher 1989, 岸根 2001c. 江島 1980: 257, (84) によると、相当箇所は「MA VI. 8-103」となる。

タラクシタが説明している。^{注51}すなわち、

自らや他者が説くこれらの存在は、真実の意味においては無自性である。何故ならば一と多を離れているからである。その自性がないものは、影像のようなものである。^{注52}

とお説きになられており、規範師シュリーグプタも [『入真實論』に]、

外と内とに存続するこのすべては、真実の意味においては、無自性である。一性と多とを離れているからである。影像のようなものである。^{注53}

とお説きになられている。これらの詳しい意味は、それらの文献自身を見るべきである。^{注54}

『空性七十論』や、『六十頌如理論』や、『根本中論』などからも、諸事物は自性を欠くものとして成立すると説明される。 [BPP205-208]

というこれにより、縁起の因が示される。これらの意味も、それらの文献自身を見るべきである。「成立すると説明される」とは、昔の偉大な賢者たちが、一切の事物は生じることがないという論証を示したものである。

以上のような四大因によりすべての事物は生じることがなく、存続せず、自性よりに涅槃であり、本来清浄なものであり、根本がなく、基体もなく、いか

注51 本テキストでは、Kamalaśīla の *Madhyamakāloka* における離一多論証については言及していない。Cf. 小林 1986, 1989.

注52 *Madhyamakālaṅkāra* 1. Ichigo 1985: CXIII, 22 (一郷 1985: 120):

bdag dang gzhan smra'i dngos 'di dag //
yang dag tu na gcig pa dang //
du ma'i rang bzhin bral ba'i phyir //
rang bzhin med de gzugs brnyan bzhin //

注53 *Tattvāvatāraṅkārikā* 1. Tib. D. No. 3892, P. No. 5292, 小林 1992: 86:

phyi rol nang na gnas 'di kun //
yang dag tu ni rang bzhin med //
gcig dang du ma'i rang bzhin nyid //
bral ba'i phyir na gzugs brnyan bzhin //

Cf. 江島 1980: 218, 塚本1990: 288-289, 小林 1994.

注54 *Śāntarakṣita* と *Śrīgupta* とによる「離一多性」による論証については、江島 1980: 215-226 において詳論されている。

なる法も成立させるものはないと昔の偉大な賢者たちがすでによく論証したのである。

インドの^{注55}国における賢者たちは^{注56}、次のように聖アサンガが説かれた異門を解説すると、彼は知恵の完全性の意味を唯識としてお説きになり、現在では師であるスヴァルナドヴィーパと、師シャーンティパも、そのように意図している。規範師ナーガールジュナが説かれた心髄を解説すると、彼は知恵の完全性の意味を、存在と非存在を越えた大中観の意味と理解しており、他の賢者のタントラにもそのように説かれている。そのように、師ボーディパドラと尊者クスル^{注57}パもそのように意図している。

聖ナーガールジュナのお言葉のその甘露により、アーリヤデーヴァ、チャンドラキールティ、バヴィヤ、シャーンティデーヴァ、ボーディパドラまで満たされ、私に少しづつ注がれる。そのように四大因により、一切の法は生じることはない^{注58}と論証されている。昔の規範師たちに従い、大中観の教義に住すべきである。

また、次の通りでもある。

今は、衆生や、時や、煩惱や、見解や、寿命の沈んだものとなっている。諸文献を聞く必要がないから、核心の意味であるヨーガを修習すべきである。

今の時代では、船と同じ広大な諸文献を聞く時間がないので、意を感わすすべてのものを捨てるべきであり、聖者の近くに示された何れかのもの

注55 Tib.: 'dzam bu'i gling.

注56 この部分は、江島 1980: 241, 袴谷1989: 131-132 に和訳がなされている。

注57 Tib.: Ku su lu pa. 彼が、どのような人物なのかは確認できていない。チベット大蔵経の北京版の目録を見ると、No. 2220 *Śrīcakrasaṃvaratattvagarbhasaṃgraha* の著者に Kusulapa (Kuśalipāda), No. 2221 *Sahajatatvāloka* の著者に Kusula, No. 2222 *Śrīcakrasaṃvaratattvopadeśa* の著者に Kusulapa (Kuśalipāda), No. 4701 *Hevajropadeśa* の著者に Kusāla (Kuśala) という名称を見ることができる。

注58 本書の著者による偈頌である。本テキスト独自の著者自身の偈頌については、Mochizuki 2002b: (31) を参照のこと。

を修習すべきである。

寿命は短いのに、知るべき相はたくある。寿命の量も、これだけであると知らないで、鴛鳥が水から乳を取るように、望む事物と行為を取るべきである。

根本偈自身が解説される。すなわち、『根本中』とは、『根本中般若論』^{注59}である。「など」とは、『無畏論』^{注61}や、『六十頌如理論』^{注62}や、『廻諍論』^{注63}や、『空性七十論』^{注64}や、『宝鬘論』^{注65}や、『大乘二十論』^{注66}や、『百字論』^{注67}や、『稻竿經広釈』^{注68}などである。また、「など」とは、聖なる規範師の弟子である尊者アーリヤデーヴァや、規範師チャンドラキールティや、規範師パーヴィヴェーカ^{注69}や、規範師シャーンティデーヴァなどが著された論書である。すなわち、それも尊者アー

注59 Sherburne 2000: 272, n. 27 が指摘するように、この最後の句は *Satyadvayāvātāra* 105-108 と同じ句である。江島1983: 367:

tshe ni yun thung shes bya'i mam pa mang //
tshe yi tshad kyang ji tsam mi shes pas //
ngang pa chu la'o ma len pa ltar //
rang gi 'dod pa dang la blang bar gyis //

注60 *Mūlamadhyamakakārikā*. Skt., de Jong 1977, Tib. D. No. No. 3824, P. No. 5224. Cf. 塚本1990: 107-114, Garfield 1995, Weber-Brosamer 1997.

注61 *Mūlamadhyamakavṛtti-akutobhayā*. Tib. D. No. 3829, P. No. 5229. Cf. 塚本1990: 208-209. 同論と背目注との関係については、Ruegg 1981: 47-48, Huntington 1995, 四津谷2000 を参照のこと。

注62 *Yuktiṣaṣṭikā*. Tib. D. No. 3825, P. No. 5225, Chin. T. No. 1575.. Cf. 塚本1990: 114-116, Tola 1995: 19-51.

注63 *Vigrahavyāvartanī*. Tib. D. No. 3828, 3832, P. No. 5228, 5262, Chin. T. No. 1631. Cf. 塚本1990: 118-121.

注64 *Śūnyāsaptati*. Tib. D. No. 3827, P. No. 5227. Cf. 塚本1990: 116-118, Tola 1995: 53-99.

注65 *Rājaparīkathā-ratnāvalī*. Tib. D. No. 4158, P. No. 5658, Chin. T. No. 1656. Cf. 塚本1990: 129-133.

注66 *Mahāyānaviṃśaka*. Tib. D. No. 3833, 4551, P. No. 5233, 5456, Chin. T. No. 1576. Cf. 塚本1990: 151-153, Jamieson 2000: 3-10, 29-46.

注67 *Akṣaraśataka*. Tib. D. No. 3834, 3835, P. No. 5234, 5235, Chin. T. 1572. ただし、漢訳では、その著者を Āyadeva とする。Cf. 塚本1990: 179-181.

注68 *Śālistambakasūtraṅkā*. Tib. D. No. 3986, P. No. 5486. Cf. 大南 1984, 1989, 1990, 1991, 1992, Schoening 1995.

注69 Tib.: bha bya snang bral.

リヤデーヴァは、『中観迷乱摧破』^{注70}や、『肢分論』^{注71}や、『手量論』^{注72}や、『智心髓集』^{注73}などを著された。規範師チャンドラキールティは、『入中論』や、『六十頌如理論広注』^{注74}や、『中観五蘊論』^{注75}や、『プラサンナパダー』などを著された。規範師パーヴィヴェーカは、『中観思釈炎』や、『般若灯論』^{注76}などを著された。そして、『根本中般若論』には、八つの注釈書が存在する。すなわち、規範師本人が著された『無畏論』と、規範師チャンドラキールティが著された『プラサンナパダー』と、規範師パーヴィヴェーカが著された『般若灯論』と、尊者ブッダパーリタが著された『ブッダパーリタ注』^{注77}と、規範師スティラマティが著されたもの^{注78}と、規範師グナマティと、規範師グナシュリー^{注80}と、規範師グナダッタが著されたもの^{注82}とである。そのうち、『般若灯論』には、二つの大きな注釈書がある。

注70 *Māhyamakabhramaghāta*. Tib. D. No. 3850, P. No. 5330.

注71 *Hastavālaprakaraṇa*. Tib. D. No. 3844, 3845, P. No. 5244, 5245, Chin. T. No. 1620. Cf. Tola 1995: 1-17.

注72 Tib.: *sor mo lta bu'i bshad pa. Hastavālaprakaraṇa (Rab tu byed pa lag pa'i tshad)?* Tib. D. No. 3848, 3849, P. No. 5248, 5249, Chin. T. No. 1620.

注73 *Jñānasārasamuccaya*. Tib. D. No. 3851, P. No. 5251. Mimaki 1976: 183-189. 同論には、Dīpaṅkaraśrījñāna の師である Bodhibhadra による注釈書 *Jñānasārasamuccayanibandhana* (Tib. D. No. 3852, P. No. 5252, Mimaki 1976: 190-207) が存在する。

注74 *Yuktiṣaṅgikāvṛtti*. Tib. D. No. 3864, P. No. 5265. Cf. Scherrer-Schaub 1991.

注75 *Pañcaskandhaprakaraṇa*. Tib. D. 3866, P. No. 5267. Cf. 塚本1990: 244-245.

注76 *Prajñāpradīpa-mūlamadhyamakāvṛtti*. Tib. D. No. 3853, P. No. 5253, Chin. T. No. 1566. Cf. 塚本1990: 224-228, Ames 1986, 1993, 1994, 1995, 細川 1979, 立川 1994, 能仁1996, 1996b, 2002.

注77 *Buddhapālita-mūlamadhyamakāvṛtti*. Tib. D. No. 3842, P. No. 5242. Cf. 塚本1990: 213-215, 三谷 1988, 1996, 2002.

注78 『大乘中観釈論』, Chin. T. No. 1567, 『卍字統蔵経』26-1, 『高麗大蔵経』 K. No. 1482. Cf. 江島 1980: 165-171.

注79 彼の注釈書は現存しないが、Bhāviveka の *Prajñāpradīpa* にその残簡が引用されている。Cf. 野沢 1954: 444-446, 江島 1980: 160-161.

注80 Ruegg 1981: 49, n. 129.

注81 以下の「規範師」については、チベット語の *slob dpon* ではなく、サンスクリットの音写である *ā tsārya* があてられている。

注82 *Avalokitavrata* によると、*Mūlamadhyamakakārikā* には、八つの注釈書があったとするものの、ここであげられている *Guṇadatta* ではなく、*Devaśarman* があげられている。続く記述に見られるように、*Dīpaṅkaraśrījñāna* は *Devaśarman* を *Prajñāpradīpa* の注釈者としており、この二名に関する情報には混乱がある。Cf. Huntington 1995: 697.

すなわち、規範師アヴァローキタヴラタが著されたもの^{注83}、規範師デーヴァシャルマンが著された『中観の白い輝き』^{注84}とである。

さらにまた、インドの国において聖なる規範師ナーガールジュナの意図を説明する偉大な賢者で、自身と他者の宗義を大海のように理解した者たちが著された文献の因により、

諸事物の自性の空性の論証が解説された。[BPP 207-208]

という。すなわち、それぞれにおいて、一切法は空たるものであるということ^{注85}を詳しく論証した。もし私が四大因により他者の誤った考察を排除するならば、テキストがとて大きくなってしまふので、それ故に私はここでは少しにして、長くはしていない。ここでは我々は「大中観の宗義は次の通りである」と言うだけで、宗義の詳細は書かない。何故ならば、瑜伽行を領受しようとする者たちに対して、少しまとめてから示したものであるから、

修習のために明らかに解説するのである。[BPP 212]

というのがそれである。ここで勝義の菩提心を修習したので、受け入れるべき方法を私は書かないので、師が喜ぶことをしてから、師に尋ねるべきである。

それ故にすべての法の^{注86}[BPP 213]

などと言いうことについて、それらは本文のままである。

注83 *Prajñāpradīpaṅkā*. Tib. D. No. 3859, P. No. 5259. Cf. 古坂 1993, 那須 1999, 1999b, 2000.

注84 彼については、江島 1980: 161-165 を参照。本テキストでは彼が *Prajñāpradīpa* に対する注釈書を著したとするが、江島 1980 が指摘するように、Avalokītavratā によると *Prajñāpradīpa* において三度言及されていることから、彼は Bhāviveka 以前に存在していたことになる。Cf. 野沢 1954: 446-448, 光川 1972.

注85 Tib.: dBu ma dkar po 'char ba.

注86 Ruegg 1981: 112.

注87 BPP 209-212:

何故ならばテキストが大きくなるので、ここでは広げずに、完成した宗義だけで修習するために明らかに解説するのである。

注88 BPP 213-216:

それ故にすべての法の自性は認識されないで、無我を修習すること自身が知恵を修習することである。

いかなるものの自性は見え^{注89}ず [BPP 218]

とは、

いかなる法も見えることがないものであることを、最高の真実と見る。と多くの経典に説かれている。この意味については、規範師アーリヤデーヴァが著された『中観迷乱摧破』を見るべきである。『思釈炎』と『入中論』とアヴァローキタヴラタ [による著作] も見るべきである。

他のすべての法の見解が完成していないのならば、この自らの心は存在するのだろうか、というならば、

その正しく解説された智恵自身を^{注90} [BPP 219]

と言う。すなわち、それぞれに分別するその知恵自身が、どこに存在するだろうか。存在しないのである。どのように存在しないのかと言えば、「正しく解説された」と言う。すなわち、それ自身も四大因により解説し、調査すれば、成立しないであろう。この意味は、世尊が『聖二諦説示経』に明らかにお説きになられている。すなわち、

勝義において一切法の知恵を考察してから、求めることもなく、把握することもない。その知恵も勝義において存在せず、知覚できないので、世俗における知恵をそなえて^{注91}いる。

と言う。すなわち、その知恵も、勝義において生じず、存在しないものである。聖ナーガールジュナも、この意味を意図してから [『菩提心釈』に]、

心は一切の仏により見られないものでも、見られるものでもない。自性

注89 BPP 217-218:

智恵によりすべての法のいかなる自性も見られず、

注90 BPP 219-220:

その正しく解説された智恵自身を分別することなく、彼は修習するべきである。

注91 *Samvrttiparamārthasatyanirdeśasūtra*. Tib. D. No. 179, Ma 260a2, P. No. 846, (Chin. T. No. 1489, 1490):

lha'i bu don dam par na chos thams cad la shes rab kyis rnam par dpyad de / btsal na shin tu med cing mi dmigs te / shes rab de yang don dam par na shin tu med cing mi dmigs pas na / kun rdzob tu shes rab can zhes bya ste /

の存在しない本質をどのように見るであろうか。^{注92}

とお説きになられている。規範師アーリヤデーヴァも、

その識も、勝義において、それを賢者はお認めにならない。一と多を離れて^{注93}いるからであり、虚空の蓮華と同じである。

と『智心髓集』にお説きになられている。聖ナーガールジュナは [『菩提心釈』に]、

アートマンに執着することを退けるために、蘊と界などを示した。唯心たるものに住してから、大部分の者たちがそれらを裂く。

「これらはすべて、唯心である」とムニがお説きになったのは、童子たちが恐怖を捨てるためであり、^{注94}真実としてはそれだけではない。

と言い、また同じものに、

注92 *Bodhicittavivaraṇa* 43. Tib. D. No. 1800, 4556, P. No. 2665, 5470. Lindtner 1982: 198:

mdor na sangs rgyas mams kyis ni //
gzigs par ma gyur gzigs mi 'gyur //
rang bzhin med pa'i rang bzhin can //
ji lta bur na gzigs par 'gyur //

Cf. 塚本1990: 162-165.

注93 *Jñānasārasamuccaya*. Mimaki 1976: 188:

rnam shes dam pa'i don ldan pa //
de yang brtan mams mi 'dod de //
gcig dang du ma'i rang bzhin dang //
bral phyir nam mkha'i pa dma bzhin //

Cf. 山口 1975: 315.

注94 *Bodhicittavivaraṇa* 25-27. Tib. D. No. 1800, 4556, P. No. 2665, 5470. Lindtner 1982: 192:

bdag tu 'dzin pa bzlog pa'i phyir //
phung po khams sogs bstan pa yin //
sems tsam po la gnas ni //
skal chen mams kyis de yang spangs //
mams par shes par smra ba la //
sna tshogs 'di ni sems su grub //
mams shes rang bzhin gang zhe na //
da ni de nyid bshad bya ste //
'di dag thams cad sems tsam zhes //
thub pas bstan pa gang mdzad de //

法無我はこうである。すなわち、大乘を喜ぶ者たちの自らの心は本来から生じるものではない。まとめるとそういうことである。^{註95}

とお説きになられている。それ故に対論者が考察したアートマンなどと、自らの宗派により考察された蘊などと、心や幻などの分別を排除してから、そのような意味に常時に住した後に、分別を捨てるべきである。それ故に聖ナーガールジュナが、

アートマンと蘊などと意識を考察することで妨げられてはいない。諸仏の菩提心は、空の特徴である、とお認めになられている。^{註96}

とお説きになられている。そのような分別を捨てることが、

最高の涅槃である [BPP 224]^{註97}

と言うものである。聖ナーガールジュナの概説により成立したものを得た後に、聖マンジュゴーシャの許可を得て、神通を得て、すべてのタントラとすべての

byis pa nmams kyi skrag pa ni //

spang ba'i phyir yin de nyid min //

Eimer 1978: 185, Lindtner 1982: 193 が指摘するように、最初の偈は Jnaśrimitra の *Sākārasiddhīśāstra* (Thakur 1959: 488) により、最後の偈は *Subhāśitasamgraha* (Bendall 1903: 394) に引用され、サンスクリットを回収することができる。

ātma-graha-nivṛṭty-arthaṃ skandha-dhātva-ādi-deśanā /

sāpi dhvastā mahābhāgaiś cittamātrav-yavasthayā // 25

cittamātraṃ jagat sarvaṃ iti yā deśanā muneh /

utrāsaparihārārthaṃ bālānāṃ sā na tattvataḥ // 27

注95 *Bodhicittavivaraṇa* 29. Lindtner 1982: 194:

theg chen dga' ba'i bdag nyid la //

chos la bdag med mnyam pa nyid //

sems ni gdod nas ma skyes te //

sangs rgyas kyiis ni mdor bsdus gsungs //

注96 *Bodhicittavivaraṇa* 2. Lindtner 1982: 186:

sangs rgyas nmams kyi byang chub sems //

bdag dang phung sogs rnam rig gi //

rtog pa nmams kyiis ma bsgrigs pa //

rtag tu stong nyid mtshan nyid bzhed //

注97 BPP 221-224:

分別から生じたこの世界は、その分別の主体である。それ故にすべての分別を捨てることが最高の涅槃である。

經典とすべての律の聖典の意図を一時に心に明らかにし、真実を見る、そのことを一つ一つ相続した師が、この吉祥なるボーディパドラであるので、この方に従うべきである。前に述べた、これらの文献の意味はこうである。⁹⁸

真実において考察するならば、顕現する法をそなえるすべてのものと、宗義などにより考察されたものはすべて、迷乱であり、虚偽であると認められる。

例えば眼病者が病気という過失により、針や、髪を結ぶ糸や、二つの月や、蜜蜂のあつまりを見たり、それを把握する知も存在する。

例えば、眠っている時に、眠りの力や薫習により、楽と苦や、物質などを領受し、それを把握する知も存在する。

そのように無始の時より、無明の眼病という病の過失により、内外の事物を領受し、それを把握する知も存在する。

また、無始の時より、無明の大熟睡という誤りにより、四つの薫習の夢を見、それを把握する知も存在する。

勝義において考察すれば、諸法の法性により、それらの誤った分別が、存在や非存在を論証することはできない。

例えば、眼病者が適当でない際に、髪を結ぶ糸が存在しないとは言えず、眼病者が適当である際にも、髪を結ぶ糸は存在するとも言えない。

例えば、無明の睡眠から醒めれば、夢を見ることはできないし、睡眠から醒めない限り夢が存在しないとも言えない。

眼病を克服して、夢から醒めたならば、髪を結ぶ糸をなどや夢とを把握する知も存在しない。

同じように、無明の眼病と無明の熟睡から醒めれば、顕現し、考察されるすべてのものを領受する知も存在しない。

注98 以下著者自身による偈頌が続く。Cf. Mochizuki 2002b.

ディーパンカラシュリージュニャーナの『菩提道灯論細疏』和訳(6)(望月)

「中斷する」とか、「中斷しない」と述べられるものが存在する、というそれも中斷する。法性にはそれが存在しない。突然に童子が考察したに尽きている。

それ故に規範師シャーンティデーヴァは、中斷することをここではお認めにならず、その教誡は存在せず、「中斷の教えである」と言う。

ここには、明らかにされるものは何も存在しないし、設定されるものも僅かばかりも存在しない。真実であるものを、真実と見るべきであり、真実を見れば、解脱するであろう。

自らと他者との宗義で、ある者は「諸法は存在する」と論証し、他の者たちは「諸法は存在しない」と言う。真実として考察すれば、「存在する」とか、「存在しない」と言うものは、究極の真実においては、それらは存在しない。それ故にどこにおいても論証できないのである。

師の相続を離れた者たちは、推論の知恵により、有・無・常・断などを論証しても、疲れてしまい目的に触れないであろう。

ダルマキールティや、ダルモッタラ^{注99}などが多くの文献を著したように、外道の論難を退けるために、賢者たちが著している。

それ故に「勝義において修習すべきものには論理学は必要ない」と私は他所で述べているので、まずここでは述べる必要がない。

それ故に推論を最高のものとしている論理の諸文献を投げ捨て、聖ナーガールジュナの聖典を相続する概説を修習すべきである。

有でなく、無でなく、有無でなく、両者でないものでもない、四つの極端から脱しているそのことが、中観論者により知られる。

常でなく、断でなく、常でも断でもなく、両者でないものでもない、四辺より脱しているそのことが、中観論者により考察される。

注99 RKU では、論理学者として Dharmakīrti と Dignāga を、経量部の論師として Dharmottara をあげている。Cf. 宮崎1993: 4.

有無のようなものを超越し、常断は捨てられ、知と所知を脱するこのことが、大中観の教義である。

推論を最高のものとしてから、有・無・常・断などを説いても、その法性には従わず、増益と損減に尽きている。

例えば、金と虚空と水などは、自性が清浄でも、過失と結びついているように現れても、それらの過失には従わない。

増益と損減は捨てられ、すべての仮設されたものから確実に脱した真実たるものを修習するべきであり、宗義に住しているべきではない。

聖ナーガールジュナと、アーリヤデーヴァと、チャンドラキールティと、バヴィヤと、シャーンティデーヴァとを相続した概説を修習するべきである。もし相続がないのならば、彼らにより著された文献を何度も見るべきである。

すべての法は、「あ」の門をそなえている。本来生じることはなく、滅することもない。本質により涅槃であり、自性としては清浄である。

見ることも、見ないことも、見られるものも、見る者も、見ることを知ることも、何も存在しない。ムニは常に、心を等しく瞑想している。

すべての分別が捨てられ、法界に住する際に、大ヨーガの知恵において、生じることや入ることを彼は望まない。

それ故に瞑想に従って得た者たちは、仏を自分自身に望まず、[菩薩]地に住していると『無分別陀羅尼』より解説される。

この意味は、ここでは詳しく著さない。私のテキストを把握している師を尊敬などにより供養して、何度も尋ねるべきである。

一切智者により授記された聖ナーガールジュナから相続したボーディバドラに従った後に、いかなる宗義も受けるべきではない。

そのように論理の観点から、「一切の法は生じることがない」と論証した後、今度は聖教の観点から「一切の法は生じることがない」と示したものが、

そのようにまた世尊も、^{注100} [BPP 224a]

などと言うものである。すなわち、根本偈自身を考察するべきである。そこでは尽きることがないこの意味は、世尊が他の經典においてもお説きになられている。すなわち、『聖法界体性無分別經』に、

そして法界を正しい認識根拠とするのならば、勝義も存在せず、世俗も存在しない。^{注102}

などと明らかにお説きになられており、『聖菩薩藏經』にも、

諦は一つである。すなわち滅するのである。^{注103}

注100 七音節からなるBPPの句であるが、Eimer 1978: 132は、根本偈としては数えずに“224a”という番号を付している。これは、この次のBPP 225-228の直後に「と説かれている(zhes gsungs so)」という句と対になっている。サンスクリットが残っていないために、これらの句がいつ添えられたのかは明らかではないが、これを根本偈として数えない方がいいように思える。また、BPP 55では、『施勇所問經』に」と述べてから引用をまとめた偈が根本偈として述べられている例と比較すると、これらの句や引用が後に挿入されたという可能性も否定はできない。ここに引用されている偈は次の通りである。BPP 225-228:

分別は大無明であって、輪廻の大海に落とすものである。無分別の三昧に住する者は、虚空のように無分別を明らかにする。

注101 BPP 229-232:

この聖法について勝者の子が分別することなく思ったならば、越え難い分別を越えて、次第に無分別を得るであろう。

BPPは、ここでも「『入無分別陀羅尼』にも」と「と説かれている」という七音節からならない句が前後に挿入されている。この引用は、ほぼ同じ形で同經に確認することができる。Avikalpapravesādhāraṇī, Tib. D. No. 142, P. No. 810, Nu 6b4-5 (Chin. T. No. 654, Eimer 1978: 135):

dam chos 'di la rgyal ba'i sras //
nram par mi rtog bsams gyur na //
nram rtog bgrod dka' nram 'das te //
rim gyis mi rtog thob par 'gyur //

ここに「根本偈」と述べていることから、本テキストの著者は引用と認識しているもの、根本偈を構成する要素として数えていたことになる。

注102 Dharmadhātuprakṛti-asambhedanirdeśasūtra. Tib. D. No. 52, Kha 142a5, P. No. 760(8), (Chin. T. No. 310(8)):

jam dpal chos kyi dbyings kyi rang bzhin la ni kun rdzob dang / don dam pa dmigs su med do //

注103 Bodhisattvapīṭakasūtra. Tib. D. No. 56, P. No. 760(12), Wi 190a1-2 (Chin. T. No. 310(12)):

gzhan yang bden pa ni gcig pu gnyis po med pa ste / 'di lta ste / 'gog pa'i bden pa'o //

などということにより、詳しく説かれている。『聖入一切諸仏境界智光莊嚴經』にも次のように、

如来は、常に生じることがない法であり、一切法は如来と同じである。
童子の知恵をもち、誤って迷乱している者は、世間に存在しない法を行じている。^{注104}

と説かれており、『聖月灯三昧經』にも、

すべてのものは空を本質とする、という勝義は、主体が知覚されず、性質自身も存在しないものである。執着を退けるために縁を解説したものは無分別であり、法の内には、語もなく、述べられることもない。^{注105}

とお説きになられている。『聖律大海』にも、

前の究極は空であり、後の究極も空である。一切の存在は本来空である。
一方では、空は外道たちのものでもある。

とお説きになられている。『聖入楞伽經』にも、

世俗においては、一切は存在する。勝義においては、自性は存在しない。
自性が存在しないことを、迷乱する者が、真実の世俗として説明される。^{注107}

とお説きになられている。『聖善勇猛般若經』にも、

注104 *Sarvabuddhaviṣayāvatārajñānālokālamkārasūtra*. Tib. D. No. 100, P. No. 768, Khu 311a7-8 (Chin. Nos. 357-358, 359, p.257a4-5):

de bzhin gshegs pa rtag tu skye med chos //
chos rnams kun kyang bde bar gshegs dang 'dra //
byis pa'i blo can mtshan mar 'dzin pa rnams //
jig rten dag na med pa'i chos la spyod //

注105 *Sarvadharmasvabhāvasamatāvipañcitasamādhirājasūtra*. Skt. Vaidya 1961, Tib. D. No. 127, P. No. 795, Chin. T. No. 639, Jap. 田村 1975. 現時点において、引用の典拠の確認はできていない。

注106 Tib. 'Phags pa 'dul ba rgya mtsho. 現時点で、テキストの確認はできていない。

注107 *Lañkāvatārasūtra*, Skt. LAS: 280. 8-10 (Tib. D. No. 107, P. No. 775, p.73.4 (Chin. T. No. 670-672):

sarvaṃ vidyati samvṛtyāṃ paramārthe na vidyate /
dharmāṇāṃ niḥsvabhāvatvaṃ paramārthe 'pi dṛṣyate /
Cf. 安井 1976: 251.

如来の知恵によりいかなるものも見られない。それは何故かと言えば、
次のように知恵には対象がないからである。^{註108}

とお説きになられており、『聖生勝者母分別説示』にも、

不動如来の国土の特殊性を述べられたので、衆会たちは、世尊に対して、
「世尊よ、不動如来のその国土を私たちに示して下さい」とお願いをし、
世尊はその世間界を示されてから、外にも見られなくなられた。世尊はお
答になられた。「例えば、不動如来のその国土は視野に現れていないよう
に、物質的存在は視野には現れない。感じることは、視野にはあらわれな
い」と。^{註109}

などと詳しくお説きになられている。この意味は、『般若経』の「聖常啼品」
にも明らかにお説きになられている。そのように、『聖消除未生怨悔経』^{註110}にも
明らかにお説きになられている。さらにまた、『聖父子相見経』^{註111}や、『聖央掘魔
羅経』^{註112}や、『聖智印三昧経』^{註113}や、『如来秘密経』^{註114}や、『聖維摩経』や、『聖念仏経』^{註115}

注108 *Suvikrāntavikramiparipṛcchāprajñāpāramitāsūtra*. Skt. Hikata 1983:7-8, Matsumoto 1932: 11 (Tib. D. No. 14, P. No. 736, Chin. T. No. 220(16), Jap. 戸崎 1973: 88):

sarvadharmās ca suvikrāntavikrāmin-aprajñāpaniyāḥ / apravartyāḥ / anirdēśyāḥ /
adrśyās ca / ... aviśayo hi jñānaṃ /

注109 *Jinajanānīvibhāganirdeśa*. Tib. P. No. 5029.

注110 *Ajātasatrukaukrṭyavinodanāsūtra*. Tib. D. No. 216, P. No. 882, Chin. T. Nos. 626-629.

注111 *Pitāputrasamāgamasūtra*. Tib. D. No. 60, P. No. 760(16), Chin. T. Nos. 310(16).

注112 *Aṅgulimālīyasūtra*. Tib. D. No. 213, P. No. 879, Chin. T. Nos. 99(1077), 100(16), 118-120.

注113 *Tathāgatajñānamudrāsamādhisūtra*. Tib. D. No. 131, P. No. 799, Chin. T. Nos. 632-634.

注114 *Tathāgatācintyaguhyānirdeśasūtra*. Tib. D. No. 47, P. No. 760(3), Chin. T. Nos. 310(3), 312.

注115 *Buddhānumṛti*. Tib. D. No. 279, P. No. 945.

や、『聖虚空色経^{註116}』や、『聖如来蔵経^{註117}』や、『聖三十三天経^{註118}』や、『聖迦葉所問経^{註119}』
 や、『聖一切法無生説示経^{註120}』や、『聖如来大悲経^{註121}』や、『聖三昧王経^{註122}』や、『聖現
 在諸仏前住立三昧経^{註123}』や、『聖三身経^{註124}』や、『聖無垢施所問経^{註125}』や、『聖妙慧童
 女所問経^{註126}』や、『聖淨信童女所問経^{註127}』や、『聖法性自性空性中不動各別一切顯現
 経^{註128}』や、『聖入楞伽経』自身や、『聖二諦説示経^{註129}』や、『聖虚空蔵経^{註130}』や、『聖無
 熱龍王所問経^{註131}』や、『聖海龍王経^{註132}』や、『聖般若経』のすべてや、『聖如来不思
 議秘密経^{註133}』などのすべての經典にこの意味を明らかに説きになられているの
 で、それぞれの經典自身を見るべきである。ここにそれらの偈頌を述べるのなら
 ば、テキストがとても大きなものになってしまうであろう。それ故に残らず

注116 Tib.: *Nam mkha' mdog gi 'dul ba'i mdo.*

注117 *Tathāgatagarbhasūtra.* Tib. D. No. 258, P. No. 924, Chin. T. Nos. 666, 667. Cf. Zimmermann 2002.

注118 *Trayastrīṣaṭparivartasūtra.* Tib. D. No. 223, P. No. 889.

注119 *Kāśapaparivartasūtra.* Skt. KP, Vorobyova-Desyatovskaya 2002, Tib. D. No. 87, P. No. 760(43), Chin. T. Nos. 310(43), 350-352.

注120 *Sarvadharmapravṛttinirdeśasūtra.* Tib. D. No. 180, P. No. 847, Chin. T. No. 650-652.

注121 *Tathāgatamahākaraṇīrdeśasūtra.* Tib. D. No. 147, P. No. 814, Chi. T. No. 398.

注122 *Sarvadharmasvabhāvasamātāvipañcitasamādhirājasūtra.* Skt. Vaidya 1961, Tib. D. No. 127, P. No. 795, Chin. T. No. 639.

注123 *Pratyutpannabuddhasaṃmukhāvasthitasamādhisūtra.* Tib. D. No. 133, P. No. 801, Chin. T. No. 417-419. Cf. Harrison 1978, 1990, 林 1994.

注124 *Trikāyasūtra.* Tib. D. No. 283.

注125 *Vimaladattaparipṛcchāsūtra.* Tib. D. No. 77, P. No. 760(33), Chin. T. No. 310(33), 338, 339.

注126 *Sumatidārikāparipṛcchāsūtra.* Tib. D. No. 74, P. No. 760(30), Chin. T. No. 310(30), 334-6.

注127 *Dārikāvimalasuddhāparipṛcchāsūtra.* Tib. D. No. 84, P. No. 760(40), Chin. T. No. 310(40).

注128 *Dharmatāsvabhāvasūnyatācalapratīśvalokasūtra.* Tib. D. No. 128, P. No. 796.

注129 *Samvṛttiparamārthasatyanirdeśasūtra.* Tib. D. No. 179, P. No. 846, Chin. T. Nos. 460, 1489, 1490.

注130 *Gaganagañjaparipṛcchāsūtra.* Tib. D. No. 148, P. No. 815, Chin. T. Nos. 397(8), 404.

注131 *Anavataptanāgarājaparipṛcchāsūtra.* Tib. D. No. 156, P. No. 823, Chin. T. No. 635.

注132 *Sāgaranāgarājaparipṛcchāsūtra.* Tib. D. No. 153, P. No. 820, Chin. T. No. 598.

注133 *Tathāgatācintiyaguhyanirdeśasūtra.* Tib. D. No. 47, P. No. 760(3), Chin. T. No. 310(3), 312.

すべての大乘經典を見ることに励むべきである。

さらにまた、知恵の完全性の心髓の意味を、不退転のままに証得した聖なる規範師ナーガールジュナや、聖なる規範師アーリヤデーヴァや、聖なる規範師チャンドラキールティや、聖なる規範師シャーンティデーヴァや、聖なる規範師パーヴィヴェーカや、規範師アシュヴァゴーシャや、聖なる規範師チャンドラゴミン^{註134} ^{註135}などが著しになられたそれらの文献は、經典の意味を明らかに説明しているので、それらもよく見ることに励むべきである。ここにそれらの教義を述べるのならば、文字がとても沢山になってしまうであろう。次のように、聖ナーガールジュナは、大部分の經典とインドにおける賢者たちによっても、次のように「初地に住する菩薩である」と述べられ、知られているが、私は經典の内から〔彼は〕第八地の菩薩である、とよく見ている。規範師アーリヤデーヴァも、聖ナーガールジュナの概説により、第八地の菩薩である、とよく見ている。規範師チャンドラキールティも、聖ナーガールジュナの概説により真実の賞賛があり、一切の法を幻のように証得し、インドの国に四百年おられてから、利他となるものをなされたのである。規範師シャーンティデーヴァも、聖ナーガールジュナの概説により聖マンジュゴーシャの秘密を得て、真実を見られている。規範師バヴィヤも、聖ナーガールジュナの概説によりその同じ身命にお

注134 Tib.: dge bsnyen zla ba. Sherburne 2000: 259 は、"Candramitra" とするが、Dīpaṃkaraśrījñāna の師である Bodhibhadra がその著書 *Bodhisattvasaṃvaraviṃśaka* に注釈を著しており、また *Aśvaghōṣa* と並記されていることから、Candragomin と判断することが妥当に思える。

注135 Sherburne 2000: 274, n.53 は、この先師の名称を列挙した箇所について、名称の表記がサンスクリットからの音写もあり本テキストの他所の表記と異なっているので、Dīpaṃkaraśrījñāna 以外の手によるとする。しかしすでに指摘したように、他所においても「規範師」という語をチベット語訳で記したり、サンスクリットの音写で表記したりしている部分もあることから、このことのみで他者の手によるものとは判断できない。そもそも彼の著作のチベット語が、彼自身によりどの程度なされていたのかは明らかではない。

いて持明があるところに来られている。規範師アシュヴァゴーシャは、^{註136}規範師アーリヤデーヴァの概説により真実を見られている。規範師チャンドラゴミンもその通りである。

それ故に以上のようなそれら広大な聖教と論理を示したものを知るべきであり、その意味を確実にするべきである。すなわち、疑惑がなくなった後に、「観」というその無分別を修習すべきである。^{註137}どのように修習すべきかといえ、まず事物には二つある。すなわち、物質的なものと、物質的ではないものとである。その二つも、大因により明らかにして、修習すべきである。

さらに次のように、

一切法は心に収められ、心も身体に収められ、身体も法界に属するこのことが概説である。^{註138}

と師が『三昧資糧品』にお説きになられている。そのように、知はどこにも分別されず、どこでも把握されず、記憶や作意はすべて捨てられている。すなわち、特徴の敵が生起する限りは、そのように存続するべきである。聖ナーガールジュナが、

すべての分別は考察されず、意は存続せず、記憶がなく、作意がなく、対象がないその方に帰依する。^{註139}

とお説きになられている。聖ナーガールジュナは、

注136 彼の所属学派については、山部能宜「馬鳴の学派所属について」(『仏教文化』12)を参照。また、彼のスモール・テキストと Dipamkarasrijñāna との関係については、望月1996, Mochizuki 2002x を参照のこと。

注137 BPP 233-236:

聖教と論理により、生じることのない一切諸法の自性は存在しないことを確実にしてから、分別することなく修習すべきである。

注138 *Samādhisambhāraparivarta*. Tib. D. No. 3924, Ki 91a2, P. No. 5319, A 100a2-3, No. 5444, Gi 178b6-7:

de bas na chos thams cad sems la sdu ba dang / sems lus la bsdu ba dang / lus chos kyi dbyings su nye bar mnal 'byor du bya ba 'di ni mang ngag go //

注139 引用箇所は、現時点で未確認である。

賢者は空たるものに対しても、空たるものと見ないであろう。^{註140}

とお説きになられている。また、

対象を離れた心は、虚空の特徴として存在する。虚空を修習することは、
空性を修習することである。^{註141}

とお説きになられている。規範師シャーンティデーヴァは、

いつであれ有と無の二つが知恵の前で存在しないその時に、他の相は存在
しないので、対象がないから寂靜である。^{註142}

とお説きになられている。修習すれば、その力となるであろう。すなわち規範
師シャーンティデーヴァが、

空性を修習すれば事物の薫習を捨てるであろう。^{註143}

とお説きになられており、規範師シュリーグプタも [『入真実論』]に、

誰であつても修習すべきことを修習する力により、一切法の自性は存在
しないことを、その本質とする。事物を見るように。^{註144}

注140 *Bodhicittavivaraṇa* 50cd? Lindtner 1982: 200:

stong nyid sangs rgyas kyis gsungs gzhan //
de dag stong pa nyid mi bzhed //

注141 *Bodhicittavivaraṇa* 51. Lindtner 1982: 200:

sems la dmigs pa med pa ni //
gnas pa nam mkha'i mtshan nyid can //
de dag stong sgom pa ni //
nam mkha' sgom par bzhed pa yin //

注142 BCA 9.35. Minayev 1889 210:

yadā na bhāvo nābhāvo mateḥ saṃtiṣṭhate puraḥ /
tadānyagatyābhāvena nirālabā praśāmyati //

Cf. 金倉1965: 174, Saito 1993: 10-11, Saito 2000: 52, 78.

注143 BCA 9.33ab. Minayev 1889 210:

sūnyatā-vāsanā-bhāvād dhīyate bhāva-vāsanā //

Cf. 金倉1965: 173, Saito 1993: 8-9, Saito 2000: 52, 77.

注144 *Tattvāvatārakārikā* 12, 小林 1994: 95:

'ga' zhing sgom pa goms pa yi //
mthu yis chos kun ngo bo nyid //
med pa yi ni bdag nyid du //
'gyur te dngos po mthong ba bzhin //

Cf. 江島 1980: 220.

とお説きになられている。それ故に残りの知恵の学ぶべきことが示された。

以上のように、空性を修習した後に、次第に煖などを得てから、**歡喜**
[地] などを得るであろう。仏の菩提は遠くない。[BPP237-240]

ここに三味のヨーガと、行道のヨーガに住した後に、そのように解説された大乘の經典の意味が完全性の道によく存続しているのが、尊者マイトレーヤがお説きになられ、聖アサンガがインドの国に大きく広められた『般若波羅蜜多概説・現観莊嚴論』^{E145}の八つの章の順序[であり、]聖ヴィムクティセーナ^{E146}と規範師ハリバドラ^{E147}が説明し解説したそれを知り続けるべきである。そのようでなければ、道果をそなえる障害となるであろう。それ故に真実であるヨーガに住する者は、資糧道に住した後に順解脱分の善根を起こしてから、加行道に触るであろう。すなわち、「次第に煖など」とは、煖位の三相と、頂位の三相と、忍位の三相と、^{E148}世第一位の三相^{E149}に住してから、順決択分の善根が起こされ、四三

注145 *Abhisamayālamkāraprajñāpāramitopadeśasāstrakārikā*. Skt. Stcherbatsky 1977, Tib. P. No. 5184. Cf. 兵藤 2000: 373-419.

注146 AA 1.3-4 に説かれている「八句義」、(1)「一切相智者性」、(2)「道智者性」、(3)「一切智者性」、(4)「一切相現等覺」、(5)「頂現観」、(6)「次第現観」、(7)「一利那現観」、(8)「法身」に基づいている。Cf. Stcherbatsky 1977 (兵藤 2000: 69-70):
prajñāpāramitāṣṭābhiḥ padārthaiḥ samudiritā /
sarvākārājñatā mārgajñatā sarvajñatā tataḥ //
sarvākārābhisambodho mūrdhaprāpto 'nupūrvikāḥ /
ekakṣaṇābhisambodho dharmakāyāś ca te 'ṣṭadhā //

注147 *Abhisamayālamkāravṛtti-pañcaviṃśatisāhasrikāprajñāpāramitopadeśasāstra*. Skt. Pensa 1967, Tib. D. No. 3787, P. No. 5185. Cf. 磯田 1975, 1979, 1980, 1981, 1992, 1993.

注148 *Abhisamayālamkāralokā-prajñāpāramitāvyaḥkyā*. Skt. Wogihara 1973, Tib. D. 3791, P. No. 5189. Index Keira 1998. *Abhisamayālamkāraprajñāpāramitopadeśasāstravṛtti*. Skt. Amano 2000, Tib. D. No. 3793, P. No. 5191, Jap. 真野 1972.

注149 チベット大蔵經には、Dipamkaraśrījñāna に帰される *Abhisamayālamkāra* に対する注釈書が存在するが、その著者性には疑問もある。Cf. Mochizuki 2000b, 望月 2001.

注150 AA 4.32 Stcherbatsky 1977 (兵藤 2000: 88):

animitta-pradānādi-samudāgama-kausalam /
sarvākāravabodhe 'smin moksabhāgiyaṃ iṣyate //

注151 「三相」とは、下品・中品・上品である。Cf. Onoda 1983: 51, 兵藤 2000: 116-117.

注152 Cf. Onoda 1983: 51, 兵藤 2000: 117.

注153 Cf. Onoda 1983: 51-52, 兵藤 2000: 117-118.

注154 Cf. Onoda 1983: 52, 兵藤 2000: 118.

味により見道などに生じることが、「衆などを得るであろう」と言うものである。「仏の菩提」とは、次のように十地を完全にしてから、一瞬にして明かに完全な菩提を得た後に、三身と五智^{註155}などを「遠からず」すぐに得ることである。

熟から把握して、すなわち行道と、見道などの十地と、三身などの設定は、テキストが大きくなってしまふ恐れがあるので、ここには書かない。

經典や論書を明らかに、注意して見るべきである。^{註156}

また「仏の菩提は遠くない」ということについて、これは怠惰な菩薩たちに喜びを起こさせるためである。「三無量劫」と説かれるそれも、遠くはなく、菩薩たちは極端な有情のために存続する。すなわち、アンバラージャが[『文殊師利仏土功德莊嚴經』に]、

私は菩提を長い道にわたって悟ることを望んだり、喜んだりしない。最後の最後に至るまで、一人の衆生のために行をなすべきである。^{註157}

とお説きになられている。『吉祥最勝第一王經』^{註158}にも、

注155 (1)法界体性智、(2)大円鏡智、(3)平等性智、(4)妙観察智、(5)成所作智とである(吉田 1982)。ここで、瑜伽行唯識派が説く「四智」ではなく、『金剛頂經』系の密教において説かれる「五智」をあげたのは、次のセクションの内容を意図してであろうか。これと同じように「三身」と「五智」を結び付ける例については、佐久間 1991: 15 がすでに指摘しているように、Abhayākaraguptaの *Munimatālamkāra* (Tib. D. A 222a3ff, P. Ha 291b2ff) に見ることができる。Cf. 佐久間 1982, 1984, 1987.

注156 著者自身による偈頌である。

注157 Sherburne 2000: 275, n.66 が指摘するように、この偈は *Mañjuśrībuddhakṣetrālaṅkārasūtra* からの引用をまとめた BPP 117-120 の異訳である(Eimer 1978: 120-121)。同經, Tib. P. No. 760(15), Wi 317b5-6 (D. No. 59, Chin. T. No. 310(15), p.346a9-10, No. 318, p.897b19-20, No. 319, p.913a20-21):

bdag ni byang chub rings tshul du //
'tshang rgyar mos shing spro ba med //
phyi mthar thug gi bar du yang //
sems can gcig phyir spyad par bya //

Sik 14.7-8:

nāhaṃ tvaritarūpeṇa bodhiṃ prāptum ihotsahe //
parāntakoṭiṃ sthāsyāmi sattvasyaikasya kāraṇāt //

注158 *Śrīparamādyakalparāja*. Tib. D. No. 487, P. No. 119, Chin. T. No. 244. 引用箇所については、現時点で未確認である。Cf. 桜井宗信「行・瑜伽類」(塚本1989), pp.220-221.

ディーバンカラシュリージュニャーナの『菩提道灯論細疏』和訳(6)(望月)

輪廻の場所に最高の賢者がいる限り、比類なき衆生のために涅槃することはできない。

とお説きになられている。聖ナーガールジュナも『誓願』^{註159}に、

衆生たちがここに何人かいて、一人の衆生が救われなければ、無上なる菩提を得ていても、その限り彼のために行をなすべきである。

とお説きになられている。それは何故かと言えば、經典に、

この世間界はすべて水の輪となり、そこである人が千年にわたって髪の毛の先端により水をそれから得ようとしたのならば、その水の輪は尽きるであろうが、衆生界は尽きることがない。

とお説きになられている。『聖普賢行讚』にも、

虚空の果てが限りないように、すべての衆生の果ても同じくらいである。^{註160}

とお説きになられている。例えば、山の王であるスメール山を極微まで砕いた後に菩提が得られるべきである、と考えるならば、それは怠惰であると説明される。それ故にアンバラージャも [『文殊師利仏土功德莊嚴經』に]、

無始の輪廻の最後の生まで、衆生の利益のために無量の行を行うべきである。^{註161}

とお説きになられている。それ故に衆生界において尽きることもなく、増える

注159 *Pranidhānaratnarāja?* Tib. P. No. 5100, 引用箇所については、現時点で未確認である。

注160 BCP 46ab (47ab). 望月1999: 28, 注(11).

注161 *Mañjuśrībuddhakṣetrālaṃkārasūtra* からの引用をまとめた BPP 117-120 の異訳である (Eimer 1978: 120-121)。同経, Tib. P. No. 760 (15), Wi 317b5-6 (D. No. 59, Chin. T. No. 310 (15), pp.345c29-a3, No. 318, p.897b9-10, No. 319, p.913a10-11):

khor ba'i tha ma med pa yi //
sngon gyi tha ma ji srid pa //
de srid sems can phan don du //
spyod pa dpag yas spyad par bya //

Sik 13.18-19:

yāvati prathamā koṭiḥ saṃsāryāntavarjitā /
tāvāt satvahitārthāya carīṣyāmyamitāṃ carim //

こともない苦しみをもつそれらの者が消えることを望むが、自分自身がすぐに成仏することを望むべきではない。すなわち、鋭い能力をそなえた勇者である菩薩で、努力をよくそなえており、心を大悲により制御しており、すべての衆生に対して大悲をそなえた、そのような者は望んでいなくても、すぐに明らかに完全な悟りを得るであろう、ということが、次に出ている。

願と入とのそのような深さと広大さと、退くことのない結果を得ること

によっても、大乘は特別に優れたものである。

と規範師トリピタカマールが『三理趣燈』^{注162}にお説きになられている。すなわち、声聞乗より波羅蜜乗が特別に優れている、と理解するべきである。波羅蜜乗を完成した。

注162 *Nayatrāyapradīpa*. Tib. D. No. 3707, Tsu 13b3-4, P. No. 4530, Nu 13b3-4:
smon lam dang ni 'jug pa dang //
de bzhin zab dang rgya che dang //
mi ldog 'bras bu thob pas kyang //
theg pa chen po khyad par 'phags //

文献と略号(前稿に続く)

- Amano 2000 Hirohide Amano, *Abhisamayālaṅkāra-kārikā-Śāstra-vivṛti*. Kyoto.
- Ames 1986 William L. Ames, *Bhāvaviveka's Prajñāpradīpa: Six Chapters*. Unpublished Dissertation. University of Washington.
- Ames 1993 Id., Bhāvaviveka's *Prajñāpradīpa*, A Translation of Chapter One, 'Examination of Causal Conditions' (Pratyaya), Part One. *Journal of Indian Philosophy* 21, pp.209-259.
- Ames 1994 Id., Bhāvaviveka's *Prajñāpradīpa*, A Translation of Chapter One, 'Examination of Causal Conditions' (Pratyaya), Part Two. *Journal of Indian Philosophy* 22, pp.93-135.
- Ames 1995 Id., Bhāvaviveka's *Prajñāpradīpa*, A Translation of Chapter Two, 'Examination of the Traversed, the Untraversed, and that which is Being Traversed'. *Journal of Indian Philosophy* 23, pp.295-365.
- 荒牧 1974 荒牧典俊『大乘仏典 8 十地経』中央公論社。
- 東 1968 東武「カマラシーラの教学について」『文化』31-4, pp.27-62.
- 東 1972 Id., 「カマラシーラと密教」『密教学研究』4, pp.138-150.
- Bahulkar 1994 Shrikant S. Bahulkar, *The Madhyamaka-Hṛdaya-Kārikā of Bhāvaviveka: A Photographic Reproduction of Prof. V.V. Gokhale's Copy*. *Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism* 15.
- Broeck 1977 José van den Broeck, *La progression dans la méditation*. Bruxelles.
- Eckel 1992 Malcolm David Eckel, *To See the Buddha*. Princeton.
- 江島 1983 江島恵教「アティーシャの二真理説」壬生台舜編『龍樹教学の研究』大蔵出版, pp.359-391.
- Fenner 1990 Peter Fenner, *The Ontology of the Middle Way*. Dordrecht.
- 古坂 2001 古坂紘一「『般若灯論広註』に見る『灯論』著作の動機と意義」『密教文化』207, pp.(1)-(22).
- Garfield 1995 Jay L. Garfield, *The Fundamental Wisdom of the Middle Way*. New York.
- Gómez 1977 Luis O. Gómez, Primer tradato del cultivo graduado, *Diogos, Revista del Departamento de Filosofía*. XII 29-30, pp.177-224.
- Goshima 1983 Kiyotaka Goshima, *The Tibetan Text of the Second Bhāvanākrama*. Moriyama.
- 林 1994 林純教『藏文和訳般若三昧経』大東出版社。
- Harrison 1978 Paul M. Harrison, *The Tibetan Text of the Pratyutpanna-buddha-sammukhāva-sthita-samādhi-sūtra*. Tokyo.
- Harrison 1990 Id., *The Samādhi of Direct Encounter with the Buddhas of the Present*.

Tokyo.

- Heitmann 1998 Annette L. Heitmann, *Textkritischer Beitrag zu Bhavya's Madhyamakahṛdaya-kārikā, Kapitel 1-3*. København.
- Hikata 1983 Ryusho Hikata, *Suvikrāntavikrāmi-Paripṛcchā Prajñāpāramitā-Sūtra*. repr., Kyoto.
- Hoonart 1999 Paul Hoonart, An Annotated Translation of *Madhyamakahṛdayakārikā / Tarkajvālā* V.1-7. 『金沢大学文学部論集 行動科学・哲学篇』19, pp.127-159.
- Hoonart 2000 Id., An Annotated Translation of *Madhyamakahṛdayakārikā / Tarkajvālā* V.8-26. 『金沢大学文学部論集 行動科学・哲学篇』20, pp.75-111.
- Hoonart 2001 Id., An Annotated Translation of *Madhyamakahṛdayakārikā / Tarkajvālā* V.27-54. 『金沢大学文学部論集 行動科学・哲学篇』21, pp.149-190.
- Hoonart 2001b Id., An Annotated Translation of *Madhyamakahṛdayakārikā / Tarkajvālā* V.55-68. 『北陸宗教文化』13, pp.13-47.
- Hoonart 2002 Id., An Annotated Translation of *Madhyamakahṛdayakārikā / Tarkajvālā* V.69-84. 『金沢大学文学部論集 行動科学・哲学篇』22, pp.113-137.
- 細川 1984 細川寛「チベット訳「般若灯論」第二十七章の解説」『高山短期大学研究紀要』7, pp.1-11.
- Hosokawa 1978 Hiroshi Hosokawa, Translation of the *Prasannapadā* Chapter XXIV, 『高山短期大学研究紀要』1, pp.17-47.
- Hosokawa 1979 Id., A Study of the *Madhyamakahṛdayavṛttitarkajvālā* (Chapters I, II, X, XI), 『高山短期大学研究紀要』2, pp.27-77.
- Hosokawa 1985 Id., A Study of the *Madhyamakakārikā* Chapter XXVII, 『高山短期大学研究紀要』8, pp.17-47.
- Huntington 1989 C. W. Huntington, Jr., *The Emptiness of Emptiness*. Honolulu.
- Huntington 1995 Id., A Lost Text of Early Indian Madhyamaka, *Asiatische Studien* XLIX-4, pp.693-767.
- 兵藤 2000 兵藤一夫『般若経釈 現観莊嚴論の研究』文栄堂。
- 一郷 1985 一郷正道『中観莊嚴論の研究』文栄堂。
- Ichigo 1985 Masamichi Ichigo, *Madhyamakālamkāra*. Kyoto.
- 一島 2001 一島正真「カマラシーラの方便と般若」『石上善應教授古希記念論文集 仏教文化の基調と展開』山喜房仏書林, pp.15-30.
- 磯田 1975 磯田熙文「Ārya Vimuktasena: *Abhisamayālamkāra-Vṛtti* (I)」『文化』39-1/2, pp.1-27.
- 磯田 1979 Id., 「波羅蜜理趣の実践論」『論集』6, pp.109-111.

- 磯田 1980 Id., 「Ārya Vimuktasena: *Abhisamayālaṃkāra-Vṛtti* (II)」『文化』43-3/4, pp.1-12.
- 磯田 1981 Id., 「Ārya Vimuktasena: *Abhisamayālaṃkāra-Vṛtti* (IV)」『論集』8, pp.126-102.
- 磯田 1982 Id., 「Ārya Vimuktasena: *Abhisamayālaṃkāra-Vṛtti* (III)」『文化』45-3/4, pp.1-13.
- 磯田 1992 Id., 「Ārya Vimuktasena: 『*Abhisamayālaṃkāra-Vṛtti*』第II章(1)」『真野龍海博士頌壽記念論文集 般若波羅蜜多思想論集』山喜房仏書林, pp.471-486.
- 磯田 1993 Id., 「Ārya Vimuktasena: 『*Abhisamayālaṃkāra-Vṛtti*』第II章(2)」『塚本啓祥教授還暦記念論文集 知の邂逅-仏教と科学』佼正出版社, pp.337-352.
- Jamieson 2000 R. C. Jamieson, *A Study of Nāgārjuna's Twenty Verses on the Great Vehicle and His Verses on the Heart of Dependent Origination with the Interpretation of the Heart of Dependent Origination*. New York.
- de Jong 1977 Jan W. de Jong, *Nāgārjuna: Mūlamadhyamakakārikāḥ*. Madras.
- Kajiyama 1989 Yuichi Kajiyama, *Studies in Buddhist Philosophy*. Kyoto.
- 川崎 1992 川崎信定『一切智思想の研究』春秋社.
- Keira 1998 Ryusei Keira and Noboru Ueda, *Sanskrit Word-Index to the Abhisamayālaṃkāralokā Prajñāpāramitāvyaḥyā*. Tokyo.
- 岸根 2001 岸根敏幸「『プラサンナバダー』第24章「聖なる真理の考察」校訂テキスト(1)」『福岡大学人文論叢』33-2, pp.1003-1024.
- 岸根 2001b Id., 「『プラサンナバダー』第24章「聖なる真理の考察」校訂テキスト(2)」『福岡大学人文論叢』33-3, pp.1761-1782.
- 岸根 2001c Id., 「『中観への入門』和訳研究(1)」『福岡大学人文論叢』33-1, pp.259-275.
- 岸根 2002 Id., 「『プラサンナバダー』第24章「聖なる真理の考察」校訂テキスト(3)」『福岡大学人文論叢』34-1, pp.197-232.
- 北島 1991 北島利親『月称釈中論 観法品・観四諦品訳註』永田文昌堂.
- 小林 1992 小林守「カマラシーラの離一多論証-『中観明』試訳(上)-」『論集』13, pp.(19)-(37).
- 小林 1992 Id., 「カマラシーラの離一多論証-『中観明』試訳(下)-」『文化』53-1/2, pp.85-103.
- 小林 1992 Id., 「シュリーグプタ作『真実への悟入』-和訳研究(上)-」『論集』19, pp.(37)-(56).
- 小林 1994 Id., 「シュリーグプタ作『真実への悟入』」『密教文化』185, pp.99-80.

ディーバンカラシュリージュニャーナの『菩提道灯論細疏』和訳(6) (望月)

- 近藤 1936 近藤隆晃『梵文大方広仏華嚴經十地品』大乘仏教研究会。
- Lindtner 1995 Christian Lindtner, *Bhavya's Madhyamakahr̥daya (Pariccheda Five): Yogācāra-tattvaviniścayāvātāra*. Madras.
- Lindtner 1998 Id., *Mahāyāna: Den senere indiske Buddhisme*. Copenhagen.
- Lindtner 2001 Id., *Madhyamakahr̥dayam of Bhavya*. Chennai.
- Lindtner 2001b Id., *Bhavya on Mīmāṃsā: Mīmāṃsātattvanirṇayāvātārah*. Chennai.
- 真野 1972 真野龍海『現観莊嚴論の研究』山喜房仏書林。
- Matsumoto 1932 Tokumyo Matsumoto, *Die Prajñāpāramitā-Literatur*. Stuttgart.
- May 2000 Jacques May, 『中観学研究』(in Korean), Seoul.
- Meadows 1986 Carol Meadows, *Ārya-Śūra's Compendium of the Perfections*. Bonn.
- Mimaki 1976 Katsumi Mimaki, *La Réfutation Bouddhique de la Permanence des Choses (Sthirasiddhidūṣaṇa) et la Preuve de la Momentanéité des Choses (Kṣaṇabhaṅgasiddhi)*. Paris.
- 光川 1972 光川豊藝「清弁の『般若灯論』にみられる提婆設摩論師への所見」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』11, pp.57-69.
- 三谷 1988 三谷真澄「中論『仏護註』第二十二章和訳」『龍谷大学大学院研究紀要人文科学』9, pp.22-39.
- 三谷 1996 Id., 三谷真澄「中論『仏護註』第17章和訳」『仏教学研究』52, pp.56-84
- Mochizuki 2001 Kaie Mochizuki, On the *Prajñāpāramitāpiṇḍārthapradīpa* of Dīpaṅkarāśrījñāna, 『印度学仏教学研究』49-2, pp.(50)-(56).
- Mochizuki 2002 Id., *A Study of the Mahāsūtrasamuccaya of Dīpaṅkarāśrījñāna*. Minobusan University.
- Mochizuki 2002b Id., The Root Verses Cited in the *Bodhimārgadīpapañjikā*, 『印度学仏教学研究』52-1, pp.(27)-(33).
- Mochizuki 2002x Id., Some Remarks on the Small Texts Attributed to Dīpaṅkarāśrījñāna. XIII IABS Conference, Chulalongkorn University, Dec. 8-13, 2002.
- 望月 2000b 望月海慧「Dīpaṅkarāśrījñāna の *Prajñāpāramitāpiṇḍārthapradīpa* について」『身延山大学仏教学部紀要』1, pp.43-88.
- 望月2001x Id., 「アティーシャと般若経 [発表資料]」日本宗教学会第60回学術大会発表配付資料, 17ps.
- 望月2002 Id., 「ディーバンカラシュリージュニャーナの『菩提道灯論細疏』和訳(5)」『身延論叢』pp.1-18.
- 望月2002b Id., 「Blo bzang dpal ldan bstan 'dzin snyan grags による *Bodhipathapradīpa* の注釈書について」『身延山大学仏教学部紀要』3.
- 望月2002c Id., 「Dīpaṅkarāśrījñāna の *Madhyamakopadeśa* について」『身延山大学仏

教学部紀要』3.

- MRP Bhavya, *Madhyamakaratnapradīpa*. Tib. D. No. 3854, P. No. 5854.
- MU Dīpaṃkaraśrījñāna, *Madhyamakopadeśa*. Tib. D. No. 3929, 4468, P. No. 5324, 5326, 5381.
- MUV Prajñāmokṣa, *Madhyamakopadeśavṛtti*. Tib. D. No. 3931, P. No. 5326.
- 長尾 1974 長尾雅人「維摩經」『大乘仏典7 維摩經・首楞嚴三昧經』中央公論社.
- Namdol 1997 Gyaltsen Namdol, *Bhāvanākramaḥ of Ācārya Kamalaśīla*. rev. ed., Sarnath.
- 那須 1999 那須真裕美「*Prajñāpradīpa-ṭīkā* 第24章の試訳」『龍谷大学大学院紀要人文科学』24, pp.16-33.
- 那須 1999b Id., 「中期中観派の二諦説(2)」『仏教学研究』55, pp.87-109
- 那須 2000 Id., 「*Prajñāpradīpa-ṭīkā* 第24章の試訳」『龍谷大学大学院紀要人文科学』25, pp.1-19.
- 能仁 1992 能仁正顕「『知恵のともしび』第1章の和訳(1)」『仏教と福祉の研究』永田文昌堂, pp.45-66.
- 能仁 1992b Id., 「『知恵のともしび』第1章の和訳(2)」『仏教学研究』52, pp.85-103.
- 能仁 2002 Id., 「『知恵のともしび』第1章の和訳(3)」『仏教学研究』56, pp.70-93.
- 野沢 1954 野沢静証「徳慧・堤婆設摩の中論疏の殘簡」『印度学仏教学研究』2-2, pp.90-95.
- 越智 1992 越智淳仁「新校訂チベット文『大日経』」『高野山大学論叢』27, pp.25-53.
- 奥住 1988 奥住毅「中論註釈書の研究 チャンドラキールティ『プラサンナバダー』和訳」大蔵出版.
- 大南 1984 大南龍昇「チベット訳ナーガールジュナ造『聖稻竿経頌』・和訳」『長谷川仏教文化研究所年報』11, pp.1-18.
- 大南 1989 Id., 「チベット語訳稲竿経広疏・広釈和訳(II)」『長谷川仏教文化研究所年報』17, pp.59-89.
- 大南 1990 Id., 「チベット語訳稲竿経『広疏』・『広釈』和訳(III)」『三康文化研究所年報』22, pp.91-125.
- 大南 1991 Id., 「チベット語訳稲竿経『広疏』・『広釈』和訳(IV)」『長谷川仏教文化研究所年報』18, pp.53-85.
- 大南 1992 Id., 「チベット語訳稲竿経『広疏』・『広釈』和訳(V)」『長谷川仏教文化研究所年報』19, pp.55-112.
- 小野2001 小野妙子「菩提道灯論細疏における菩薩戒について」『仏教大学大学院紀要』29, pp.25-38.
- Onoda 1983 Shunzo Onoda, *rJe btsun pa'i don bdun cu*. Nagoya.
- Oshika 1970 Oshika Jisshu, Tibetan Text of *Vimalakīrtinirdeśa*, *Acta Indologica* I,

pp.(1)-(103).

- 大鹿 1988 大鹿實秋『維摩經の研究』平楽寺書店。
- Pensa 1967 C. Pensa, *L'Abhisamayālamkāravṛtti di Ārya Vimuktisena*. Roma.
- Qvarnström 1989 Olle Qvarnström, *Hindu Philosophy in Buddhist Perspective*. Lund.
- RK Dipamkarasrijñāna, *Ratnakaraṇḍoghāṭa-nāma-madhyamaka-upadeśa*. Tib. D. No. 3930, P. No. 5325.
- Ruegg 1981 David Seyfort Ruegg, *The Literature of the Madhyamaka School of Philosophy in India*. Wiesbaden.
- Ruegg 2002 *Two Prolegomena to Madhyamaka Philosophy: Studies in Indian and Tibetan Madhyamaka Thought Part 2*. Wien.
- Saito 1993 Akira Saito, *A Study of Akṣayamati (= Śāntideva)'s Bodhisattvacaryāvatāra as Found in the Tibetan Manuscripts from Tun-huang*. Mie.
- Saito 2000 Id., *A Study of the Dūn-huang Recension of the Bodhisattvacaryāvatāra*. Mie.
- 佐久間 1982 佐久間秀範「五法と三身の結び付き-仏地経論を中心として-」『印度学仏教学研究』31-1, pp.124-125.
- 佐久間 1984 Id., 「〈智〉と〈識〉」『豊山学報』28/29, pp.125-141.
- 佐久間 1987 Id., 「〈三身〉と〈五法〉-両者の結合関係とその成立過程」『高崎直道博士還暦記念論集 インド学仏教学論集』春秋社, pp.387-411.
- 佐久間 1991 Id., 「『現観莊嚴論』第八章をめぐるインド諸注釈家の分類」『四天王寺国際仏教大学文学部紀要』24, pp.1-30.
- 桜部 1969 桜部建『俱舍論の研究 界・根品』法蔵館。
- Scherrer-Schaub 1991 Cristina Anna Scherrer-Schaub, *Yuktiṣaṣikāvṛtti*. Bruxelles.
- Schoening 1995 Jeffrey D. Schoening, *The Śālistamba Sūtra and Its Indian Commentaries*, 2 vols. Wien.
- SD Dipamkarasrijñāna, *Satyadvayāvatāra*. Tib. D. No. 3902, 4467, P. No. 5298, 5380.
- Sharma 1997 Parmananda Sharma, *Bhāvanākrama of Kamalaśīla*. New Delhi.
- Stcherbatsky 1977 Theodore Stcherbatsky, *Abhisamayālamkāra-prajñāpāramitā-upadeśa-Śāstra*. repr. Tokyo.
- 立川 1994 立川武蔵『中論の思想』法蔵館。
- 田村 1975 田村智淳・一郷正道『大乘仏典10-11 三昧王経1・II』中央公論社。
- Taniguchi 1992 Fujio Taniguchi, Quotations from the First *Bhāvanākrama* of Kamalaśīla Found in Some Indian Texts, *Tibetan Studies: Proceedings of the 5th Seminar of the International Association for Tibetan Studies NARITA 1989*,

Vol. 1, pp. 303-307.

- 谷口 2002 谷口富士夫『現観体験の研究』山喜房仏書林。
丹治 1988 丹治昭義『中論釈 明らかなことば 1』関西大学出版部。
Tauscher 1989 Helmut Tauscher, *Verse-Index of Candrakīrti's Madhyamakāvātāra*. Wien.
Thakur 1959 Anantalal Thakur, *Jnaśrīmitranibandhāvali*. Patna.
Tola 1995b Fernando Tola and Carmen Dragonetti, *Nāgārjuna's Refutation of Logic (Nyāya): Vaidaylaprakaraṇa*. Delhi.
戸崎 1973 戸崎宏正『善勇猛般若経』『大乘仏典1 般若部経典』中央公論社。
塚本 1989 塚本啓祥・松長有慶『梵語仏典の研究IV 密教経典篇』平楽寺書店。
Tucci 1932 Giuseppe Tucci, *The Abhisamayālaṅkāraloka of Haribhadra*. Baroda.
Tucci 1971 Id., *Minor Buddhist Texts Part III*. Roma.
Tucchi 1986 Id., *Minor Buddhist Texts Part I & II*. repr., Delhi.
Vaidya 1961 P. L. Vaidya, *Samādhīrājasūtra*. Darbhanga.
Vorobyova-Desyatovskaya 2002 M. I. Vorobyova-Desyatovskaya, *The Kāśyapaparivarta Romanized Text and Facsimiles*. Tokyo.
Walleser 1914 Max Walleser, *Prajñāpradīpa, A Commentary on the Madhyamakāsūtra by Bhāvaviveka*. Calcutta.
Watanabe 1998 Chikafumi Watanabe, A Translation of the *Madhyamakahrdayakārikā* with the *Tarkajvāla* III. 137-146. *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 21-1, pp.125-155.
Watanabe 2000 Id., Bhāviveka on Invalidations by pratyakṣa and pratīti: The *Madhyamakahrdayakārikā* III. 176-181. *Annals of Bhandarkar Oriental Research Institute* LXXX, pp.155-166.
Weber-Brosamer 1997 Bernhard Weber-Brosamer and Dieter M. Back, *Die Philosophie der Leere*. Wiesbaden.
山口 1975 山口益『中観仏教論攷』山喜房仏書林。
吉田 1982 吉田宏哲『瑜伽行唯識から密教へ-四智から五智へ』『講座・大乘仏教 8 唯識思想』春秋社, pp.235-261。
芳村 1959 芳村修基編『大乘稻竿経の註釋』龍谷大学東方聖典研究会。
四津谷 2000 四津谷孝道『鳩摩羅什訳『中論』「観法品第十八」覚え書き』『平井俊榮博士古稀記念論集 三論教学と仏教諸思想』春秋社, pp.17-45。
Yuyama 2002 Akira Yuyama, Restoration-Translation-Emendation, Along the Way to Revisit the *Vimalakīrti-nirdeśa* Cited by Kamalaśīla in his *Bhāvanākrama* III. *Buddhist and Indian Studies in Honour of Professor Sodo Mori*, Hamamatsu, pp.215-224.

ディーバンカラシュリージュニャーナの『菩提道灯論細疏』和訳(6)(望月)

- 湯山 1969 湯山明「Kamalaśīla の *Bhāvanākrama* に引用された維摩経」38, pp.105-99.
Zimmermann 2002 Michael Zimmermann, *A Buddha Within: the Tathāgatagarbhasūtra, the Earliest Exposition of the Buddha-Nature Teaching in India*. Tokyo.

(本研究は平成14年度日本学術振興会科学研究費「基盤研究(c)(2)」による研究成果の一部である)